

琉球大学学術リポジトリ

第4回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30496

第4回 びぶりお文学賞 受賞作品集

2010

爪探し 小山響平

冬瓜 玉那覇 浩規
 青年BBS 華井 けい
 歓喜の挽歌 菅谷 聡



琉球大学

第4回 びぶりお文学賞 受賞作品集

2010年度 琉球大学

上	ヌ・上	工	ニ・工	七	イ・五
合	チ・合	合	ヒ・工	工	
工	ン・合	工	キ・工	合	ク・工
合	ダ・合	中	ト・中	五	レ・五
乙	ラ・乙	上	メ・上	七	テ・七
四	カ・四	四	ル・四	五	カ・五
中	ヌ・中	○		合	エ・五
上	シャ・上	四	マ・四	四	レ・工
老	マ・上	合	タ・四	中	バ・中
四	ヨ・四	上	ハ・上	上	ヤ・上
合		合		合	レ・上

琉球大学附属図書館報『びぶりお』特別号

2010年度 国立大学法人 琉球大学

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号

第四回琉球大学びぶりお文学賞作品集

第四回琉球大学びぶりお文学賞 目次

受賞作

爪探し

小山響平

6

(理学部・物質地球科学科物理系三年次)

佳作

冬瓜スライ

玉那覇浩規

38

(法文学部・総合社会システム学科三年次)

佳作

青年BBS

華井けい

68

(法文学部・国際言語文化学科夜間主二年次)

佳作

歓喜の挽歌

菅谷 聡

92

(教育学部・島嶼文化教育コース四年次)

山里勝己 「第四回びぶりお文学賞選評」

喜納育江 「第四回びぶりお文学賞選評」

大城貞俊 「新鮮な発想に大きな可能性―第四回びぶりお文学賞選評」

選考経過

129

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地球及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、想像力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。

裝幀
上村
豊

第四回琉球大学びぶりお文学賞作品集

受賞作

爪探し

小山響平

「ゴミ箱の中の、爪のことばかり考えていた。

爪とは言っても、僕の生まれ持った指先の爪ではないし、その切れ端でもない。三線の演奏に使う道具のことだ。バチ、とも言うらしい。とにかく、今朝も起きてから寝床の中で、身じろぎもせず、僕は爪のことばかり考えていた。

爪は、人の親指を根元から切り取ったような形をしていて、大きさもちょうどそのくらい。素材は水牛の角で、黒く、表面は油をぬったようにすべすべとしていて、鉄ほどではないが、プラスチックよりは硬そうだ。

三線の爪がゴミ袋の底で、すでに腐敗を始めたバナナの皮や、インスタント食品のパッケージからにじみ出た、不潔な水に浸されていることを、僕は知っていた。それでもこの一週間、僕は、爪がゴミ箱にかけられた袋の底で、毎日継ぎ足されるゴミに、埋もれるままにしていた。

今日は、燃えるゴミの日だ。

ベッドに横になったまま薄く目を開けると、外は晴れているようだったが、部屋はまだ薄暗い。目覚ましの鳴った覚えもないから、また早く起きてしまったらしい。口を閉じたまま、鼻で軽いため息をつくとき、ヒカルのにおいがした。傍らの寝息のするほうを見ると、ヒカルはこちらを向いたまま、眠っていた。二人で使っていたタオルケットを一人で巻き取り、たぶん夢すら見ていないのだろう。まったく身じろぎしないまま、規則正しい呼吸を繰り返している。ヒカルが僕の部屋に泊まるのは、久しぶりのことだ。

時間は六時十五分。寝顔に触れようとして、やめた。もうすぐ太陽が顔を出す。僕が起こさなくても、朝日が起こしてくれるだろう。ヒカルの眠りを妨げないように気をつけながら、僕は寝床を離れた。

身に着けているのはTシャツとトランクスだけだが、秋の沖繩にはまだ充分だ。僕の部屋は、大学に程近い築二十年のアパートの三階。板張りの六畳ワンルーム。トイレとシャワーは別ではない。そのトイレの床は青色の妙なモザイクだが、それ以外に二年住んで、これといった不満はない。

トイレの床の、ひんやりした青いタイルを踏んで、便器の前に立つと、ずいぶん自分が汗臭いことに気づいた。ヒカルのも混ざって、普段と違う臭いになっている。嫌というよりは、気になる。便器に注ぎながら、すぐ横のシャワーヘッドに目をやったが、シャワーを浴びる気にはなら

なかった。

今日は、午前中一杯暇なのだ。シャワーを浴びる時間は充分にあるし、何よりおながすいていた。まずは、朝ごはんだ。

部屋に戻ると、部屋の空気にも、ヒカルの気配がした。

「これかあ」

窓を開けないとこうなるのか。最近、夜の空気がすこし北風めいてきて、窓を閉めて眠るようになっていた。ヒカルがよく泊まりに来ていた夏の間は、窓を開けっ放しで眠っていたから、空気がこもることもなかっただろう。香りの持ち主は、ベッドの上でまだ眠ったままだ。嫌ではない。でも、気になる。

僕の部屋の居間と台所には、明確な境界がない。台所で調理をしながらでも、すこし振り返れば、部屋全体を見渡せる。眠りの浅くなり始めたヒカルの気配を感じながら、僕は朝食作りにとりかかった。

冷凍庫の中には、六枚切りの食パンが一斤。ごちゃごちゃした冷蔵庫には、味噌やコーレーグースーなどもあったが、朝食はトーストにするから、戦力になりそうなものは卵とリンゴだけだ。

卵も、買ってきてそのまま冷蔵庫に放り込んでおいた十個パックがあったので、四つ取り出し、短い時間でもなるべく室温に近づけるため、ボールに張ったぬるい水道水に沈めておく。

リンゴは四等分し、種と皮を取り除いてからさらにそれを半分に分ける。赤いリンゴを八つの黄色い三日月形にして、皿に入れてラップをし、冷蔵庫に戻す。

リングの皿を冷蔵庫に入れると、奥のほうにトマトを見つけたので、取り出した。赤い皮はまだみずみずしさを残していたが、ヘタはほとんど枯葉のように乾燥していた。とりあえず洗って半分に切ると、皮の表面がすこし乾き気味なものの、食べるには問題なさそうだ。リングと同じように八等分して、ためしに一切れ食べてみると、トマトの酸味が、わずかに残っていた眠気を消していく。問題なさそうだ。コップに水をくみ、口の中に残っているトマトの気配をゆずぎがてら、目覚めの水を飲み込んだ。

「さて」

どうしようか。

準備というには、あまりにも簡単すぎる朝食のしたくは、これでほとんどできてしまった。あとは卵でオムレツを作つて、食パンを解凍すればいいのだけれど、肝心のヒカルがまだ起きない。どうせなら、焼きたてのオムレツがいいだろうし、本来起きる予定だった六時半まで、まだ数分ある。なんとなく手持ち無沙汰になり、僕は流しによりかかった。ここからだ、居間がよく見えるが、ベッドとちゃぶ台の他には、あまり大きなものが無い。三線のケースをはじめ、こまごましたものは、壁際に追いやられている。ベッドのサイズは普通だが、ヒカルが寝ると大きく見えた。ヒカルは細いとか、華奢というわけではない。ただ、小さいのだ。身長は155センチくらいで、極端に低くはないが、かなり引き締まった体つきをしている。引き締まりすぎて、体のラインは女性的というには程遠い。加えて髪は短く刈り込むほどのベリーショートなので、ただでさえ低い背丈に、余分なものがほとんどつかないため、離れると、本当に小さく見える。うま

れつき肌が小麦色なことも加わって、ヒカルは少年のように見えることすらあった。

それなら、身長178センチの僕は、ヒカルにはどんな風に見えるだろう。

僕にはいつからか、自分とヒカルを比べる癖がついていた。最初は、あまりに対称的な、自分とヒカルの対比が、純粹におもしろかったからだ。たとえば、身長。それに僕は男でヒカルは女。僕は大学に来るまで関東で生まれ育ったし、ヒカルは生粋の沖縄人だ。興味のある事柄も違っている。大学での専攻は、僕は法学で、ヒカルは電気工学。僕の趣味は読書と旅行だけど、ヒカルの趣味は音楽で、バンドにもかなり力を入れている。

僕が三線に手を出したきっかけも、沖繩という環境より、ヒカルの音楽に向ける情熱にあてられたようなものだ。楽しいげにバンドのことを話すヒカルのことがうらやましかった。大学の授業で三線を選択できると聞いて、ためらうことなく登録したとき、僕の脳裏には、ヒカルの楽器を演奏する姿があった。僕は少なからず、ヒカルから影響を受けているのだ。

目覚ましが鳴った。ヒカルの携帯から流れるアラームは、映画ロッキーのテーマ。
なぜロッキー。

しかし、その持ち主はなかなか反応しない。僕と同じくらいの睡眠時間のはずなのに、ヒカルはものすごく寝起きが悪い。ロッキーのテーマが二周目に入ったところで、ようやくタオルケットから手が伸びた。

「ん……」

枕もとのアラームを切るだけで力尽きたのか、携帯に手を伸ばしたそのままの姿で、ヒカルはまた寢息を立て始めた。こちらはもう空腹でたまらないので、ベッドに歩み寄ると、声をかけた。

「おはよう、ヒカル」

タオルケットにくるまったイモムシは、ほとんど反応がない。もう一度呼びかける。

「ヒカル？」

「んー」

肩に手を伸ばそうとすると、ヒカルが顔をこちらに向けた。大きな二重の目をしょぼつかせ、軽く指でこする。

「ああ、泊まったんだよね。おはよう」

あくび交じりに、ヒカルは言った。

「おはよ」

「もしかして、見てた？」

ヒカルは、僕がずっと先に起きていたことに気づいたようだ。

「ん？」

「寝顔を見たかって」

「うん。あと、映画のテーマを覚ましにしてもなかなか起きなくて、二度寝しかけてるところも。ロッキー、好きだったっけ？」

「おととい見たんだよ。気に入っちゃってさ……って言うか、なんだよ。見るなよ、もう」

やっと顔を出したタオルケットに、ヒカルはまた顔をうずめてしまった。こちらとしては、なるべく早いところ朝ごはんにしたいのだが。それと、聞くまでもないことだけ。

「ねえ、ヒカル。目玉焼きとオムレツ、どっちがいい？」

「……………オムレツ」

枕に顔を突っ伏したまま、ヒカルは答えた。

台所に戻り、水を張ったボールの中から、潰けておいた卵を取り出す。冷蔵庫に入っていた卵を室温に戻すため、ぬるい水道水につけておいたが、まだ卵は冷たいままだった。まあ、しかたない。ボールと卵の水気を切り、空のボールに卵を割り入れ、塩コショウしてかき混ぜる。

ベッドのほうで、ヒカルが立ち上がる気配がした。タンクトップに短パン。裸足で板の間を歩く、ぺたぺたという足音をさせ、無言のままトイレに入った。

僕は流しの下からフライパンを取り出し、軽く表面を水で洗った。台所の窓を開けて換気扇を回し、水を払ったフライパンを火にかけ、水滴が蒸発するのを見計らって、サラダ油を入れた。本当ならバターがいいのだけど、残念なことに切らしていた。

水の流れる音が二回。トイレから出て流しで手を洗い、ヒカルは僕の手元を見た。

「パン、だよね」

冷蔵庫の上に置かれた電子レンジと、そのまた上に置かれたトースターの中に、何もないことを確認し、ヒカルは言った。

「うん」

ヒカルはまず、トースターのタイマーを回し、余熱させる。

「お皿ちょうだい」

流しの上につくりつけられた食器棚は、ヒカルの背では手が届かない。僕は同じ形の平皿を三枚取り出した。

ヒカルは冷凍室から六枚切りの食パンを取り出し、袋を開ける。

「何枚？」

「二枚、おねがい」

「トーストだよね」

僕はうなずいた。

すでに赤く光っているトースターの中に、ヒカルは食パンを二枚放り込んだ。そして皿に凍ったままの食パンを二枚のせ、電子レンジに入れるが、まだスイッチは押さない。ブレイカーが落ちてしまうので、トースターとレンジは一緒に使えないのだ。

僕は、ちょうどよく温まったフライパンに卵の液を一気に流し入れた。中火でフライパンをゆすりながら、まずはスクランブルエッグを作るように菜箸でかき混ぜていく。卵が半熟になったら、全体を折たたみ、フライパンの背で形を整えていく。ほどよい葉巻型になったところで弱火にし、焦げないように注意しながら、オムレットの中に火を通していく。

チンと、トースターの音がなり、熱源の赤い光が消えた。ヒカルはトースターからパンを取り

出さずに、電子レンジのスイッチを入れる。凍ったままの食パン二枚が温められていく。トースターの中の食パンが僕の方で、今あたためているのがヒカルの分だ。ヒカルは、トースターではなく、電子レンジであたためた食パンのほうが好きらしい。ふかふかして焼きたての味がする、というが、僕はサクサクとしたトーストのほうが好きだ。

フライパンをゆすつてもオムレツがあまりゆれなくなったので、菜箸で半分に切り、皿に移す。まな板の上においてあったトマトも盛り付け、居間のちゃぶ台に運ぶ。

ついでに窓を開け、居間の換気をしようとした。でも、今朝は風が無いようで、しばらく待つても空気は動かず、ヒカルのおいも薄まる様子は無かった。嫌ではない。ただ、気になる。

僕が台所に戻ると、入れ替わりにヒカルが居間に向かう。レンジから取り出した皿にトースターの食パンものせ、ちゃぶ台へと持っていく。僕は冷蔵庫から、マーガリンとジャム、牛乳とケチャップを取り出し、戻ってきたヒカルに渡した。さらに、切っておいたリングも取り出し、戸棚からはジャム用のスプーンとフォークを二本、コップ二つを持って居間に戻る。ヒカルは先にちゃぶ台の定位置に就いていた。コップに牛乳を注ぎ、僕も座る。

「いただきます」

僕は、まだ熱いトーストに、マーガリンを薄くぬる。ヒカルはオムレツにケチャップをたっぷりかけ、フォークで一口分すくうと、レンジで温めたふにゃふにゃの食パンに乗せてかじりついた。

「ん」

口を動かしながら、ヒカルは僕にケチャップをよこした。

「ありがとう」

ヒカルほどではないが、それでも多めにケチャップをかけ、オムレツをパンに乗せてかじる。サクサクとしたトーストの歯ざわりにわずかなマーガリンの香りが加わり、半熟の卵の甘みとケチャップの酸味が口の中に広がる。

「オムレツ作るの、上手いよね」

一口目を飲み込んで、ヒカルは言った。

「ありがとう……でも、バターがあればもっとおいしいんだけどね」

バターは少しずつしか使わないものだし、なくても他の油で代用できる。必要性があまりないから、つい買い忘れてしまうけど、やっぱりオムレツを作るには、バターが無いと物足りない。

「マーガリンじゃだめなの？」

ヒカルはマーガリンの容器を指差した。パッケージには、バター風味と書いてある。

「だめってことは無いだろうけど、どうせつくるなら、バターが良いかなあ」

きつとマーガリンを使えば、サラダ油よりもオムレツをおいしくつくれるだろう。でも、偽者のバターであるマーガリンに、本物の風味が出せるとも思えなかった。それならいつそ、サラダ油でいいじゃないか。もう一口、今度はパン無しで、オムレツだけを口に運ぶ。バターの気配がまったくないと、それはそれで卵の風味が生きてくる。中途半端な代用品で取り繕うより、あきらめてしまうほうが、すっきりしていて良いのだ。

「そっか、なら今度試してみるよ。意外とおいしいかもしれないでしょ？」

「……うん」

たしかにそうだ。マーガリンで作ったオムレツもおいしいかもしれない。でも僕は、代用品で満足してしまうことを、嫌うというか、恐れに近い感情で遠ざけようとしていた。

だめだ。

頭を振るうことなく、考えを追い出す。恐れだとか、嫌うだとか、所詮はオムレツのことじゃないか。何深刻に考えているんだ。いま、目の前にオムレツがあつて、それをヒカルもおいしいと言ってくれる。それでいい。気分を変えようと、付け合せのトマトを食べる。ヘタこそしなびていたが、食べる分には問題ない。

そう、このトマトはすこし古くなつてはいたけど、代用品なんかじゃなく……なに考えているんだ、僕は。うん、話題を変えよう。

「今日は、授業あるの？」

「うん、わたしは二限目だけ。水曜日だからね」

「じゃあ、十時くらいまでは居られるのか」

「そだね。更衣室に着替え置いてあるから、ちよつと早く出て、シャワーもそこで。きみは休みなんだよね」

「僕は三限だけ」

水曜日の三限こそ、例の三線の授業だった。

「あれ？ 水曜は、授業入れないんじゃないっけ？」

元から水曜日は授業が少ないので、授業を入れずに、自主的な休日にしてしまっている学生も多い。かくいう僕も、可能な限りサボりたいので、水曜は休みにすると、前にヒカルに話した。

「うん、ちよとね」

「なにか、単位落としてたっけ？ とらなくちゃいけない授業があるとか？」

「いや、そうじゃないんだけどね」

爪のこともあって、どうも歯切れの悪い返事しかできない。

「何の授業？」

一枚目の食パンを食べきりながら、ヒカルは聞いてきた。

「三線……の授業だよ」

ヒカルの目つきが変わった。モグモグと動かしていた口を止め、牛乳で一気に流し込むと、ヒカルは目を輝かせた。

「じゃあ、あれやつぱり三線なんだ」

ヒカルは座っている僕の背中側を指差した。

そこには、横幅が縦の五倍ほどもある、妙に長いアルミのアタッシェケースが横たわっているはずだ。前にヒカルが来たときはまだこの部屋に無かったはずだ。

「そう。授業でやるならって、せっかくだから買っちゃった。習い始めたばかりなのにね」

「弾けるんだ」

自分の好きなことに人を誘い込んだ者の、特有な興奮だろう、音楽好きのヒカルは言った。

「だから、はじめたばかりだって。まだ、指の押さえ方もわからないくらいだし、安里屋ユンタだって満足に弾けないよ」

「そっか、でも聞きたいな……聞かせてよ。下手でも笑わないからさあ」

食事をするヒカルの手は止まっていた。ヒカルにとって、音楽は食事よりも優先すべき事柄なのだ。

「僕も、できたら聞いてほしいんだけどね、その……」

「あ、はずかしい？」

「そうじゃなくてさ、爪をなくしちゃって」

嘘だ。

「ツメ？ ああ、爪ね」

「それでさ、習い始めたころは、変なクセをつけないように、できるだけ爪をつけて練習するよ
うに言われてるんだ」

「三線の先生から？」

「そう」

唇についたケチャップをぬぐいながら、ヒカルは考え込んだ。

「うーん、たしかにそうかも。でも、無くても弾けるんだよ。自分の人差し指を爪に見立ててさ。」

こうやってね」

親指を人差し指の第一関節につけて、こちらに差し出した。

「でもやつぱり、爪をつけて練習したいな。近々買いにいこうとは思ってるんだけどね」

「そっか、じゃあ今度買に行こうよ」

「そう言うどパンにジャムを塗って、ヒカルは食事を再開した。

なぜこれほど、くだらない嘘をついてしまうのだろう。僕は自分が嫌になった。その嘘が、ヒカルの好きな音楽に関する話題であつたことが、自己嫌悪に拍車をかけている。

水牛の角を削つてつくられた、黒い爪。三線を買うときに、店員からすすめられ、プラスチック製よりも少し割高だつたが、年輪を思わせるわずかな模様の入つたその見た目と、持つたときのなめらかな感触にひかれて買ってしまつたのだ。他の爪と弾き比べたことは無いけれど、指になじむ感じもしたし、気に入つてきたところだつた。それでもこの一週間、あの爪はゴミ袋の底に入つたままだ。水牛の角は、汚い水にも耐えるのだろうか？ 一週間も腐つた水に漬けられて、傷んだりしないのだろうか？ プラスチックなら、洗えば済むだろう。でも、生き物から削りだし、生き物の組織であることを主張する模様の入つた、あの黒い爪は、生物であるがゆえに腐つた水に汚染されてしまうように思えた。それなら、少しでも早く取り出して、洗つてやらなければならぬはずだ。なのに、僕の手は動かないままだ。

「ねえ、どうしたの？」

覗き込むようにして、ヒカルは僕の顔を見ていた。

「え？」

「食べないの？」

見ると、ヒカルは自分の朝食をきれいに食べきっていた。

ヒカルは心配そうな視線をそのままに、あからさまに僕のパンに手を伸ばす。

「いやいや、食べるからね。とらないでね」

伸ばされた手をかろく叩くと、ヒカルは笑った。

「ん、ごちそうさまでした」

すると、さつさとヒカルは自分の食器を台所に下げてしまった。水の音が響き、食器を洗う気配がする。

「洗わなくていいよ」

「ちよつとだから、気にしないで」

フライパンやまな板まで片付けているらしい音がしたが、それもすぐに止んだ。ヒカルはまるで忍者のようにすばやく、居間に戻ってきて、僕の横にかがみこんだ。

「三線、見ていい？」

断る理由はなかった。

「べつに、いいけど……」

僕が言い終わるより早く、ヒカルは三線のケースを抱えて、ベッドに腰掛けた。

「いいけど、なに？」

僕はなんて言いたかったんだろう。汚すなよ？ 壊すなよ？ ヒカルがそんなことするわけない、と思う。

「いいけど、弾けるの？」

「聞いてみる？」

ヒカルはケースを開け、三線を取り出した。見た目は一応、本物の三線。ただし、胴に張っているのは蛇の皮ではなく、とても硬い布にプリントを施したものだ。蛇の皮の代用品ということだ。

「おお、新品のにおいがするね」

「においなんてしたっけ？」

「鼻で感じるにおいっていうより、気配みたいなものかな？ 棹がこう光るのは、新品じゃないとね。使ってくるうちにどうしても傷むし。まあ、使い込んだ三線の、それはそれでいいんだけど、新品には新品のよさがあるってこと」

ヒカルは三線をやたらとひっくり返したり、撫でさすった。

「はあ、そうですか」

「そうそう」

糸巻きをいじって、音程のチューニングまでしている。おもちゃを与えられた子供、いや、ボールを見せられた子犬という感じだろうか。とにかくうれしそうに三線をさわっていたが、その手つきはずいぶん慣れたものだった。いつもさわっているギターの感覚に近いのだろうか？

僕は、すっかりさめたトーストを、やっつけなければならなかった。サクサクではなく、しけたせんべいのような食感になってしまったパンに、マーガリンとジャムをぬってかじりつく。

ひととおり満足したのか、三線をタオルケットの上におくと、ケースから、薄い大判のテキストを取り出した。タイトルは三線入門。

「授業で使ってる教本って、これ？」

最初のほうからページをめくりながら、ヒカルは言った。

「そう、あまり曲もないけどね」

テキストに書かれている工工四は、たしか十五曲ほどだった。それに加えて、三線の部位の紹介とか、音の合わせ方とか、簡単な歴史について書かれたページもあったはずだ。

「ふーん……ああ、オオジルって、男の絃ってことだったんだ」

まさに、三線に関する説明のページを、ヒカルは読んでいた。

「どういうこと？」

「うん、三線って、名前の通り三本の絃があるさ。で、一本ずつに名前がついてて、太いほうからオオジル、ナカジル、ミジルって言うの。この本だと、オオは男、ミは女の事だって書いてあるんだよ。わたしはずっと、オオって大中小の大のことだと思ってたわけ。ナカはそのまま中ですよ？ だから、どうしてコジルじゃなくてミジルなのかって、不思議だったの。男と女かあ……そっかそっか」

ヒカルは、最後のほうは自分で納得するようにつぶやいた。

「三線、弾いたことあるの？」

いままで、ヒカルと三線について話したことはなかった。ギターばかりで三線にはさわったことないと思っていたのだ。

「じいちゃんが弾ける人だったから、教えてもらったの」

テキストのページをめくりながら、ヒカルは答えた。

「ああ、安里屋ユンタ。やったなあ」

丸められたタオルケットの上から三線を持ち、一度出だしを確認すると、ヒカルはおもむろに弾き、そして歌い始めた。

上手い。絃のおさえ方に迷いがなく、爪を使わないで弾いているのに、音が伸びる。唄も、ライブのときのような今風の発声ではなく、まさに民謡のための声だ。ヒカルの口から直接聞いているのではなく、ヒカルの頭のとっぺんから部屋に広がった音の波が、僕の頭のとっぺんに集まって流れ込んでくるような、腹のそこから響く高音。歌詞は最初こそ、工工四を見ながらだったが、二周め以降はそれすら見ず、完全にそらで四番まで、流れるように唄い上げた。

歌が終わり、ヒカルが演奏の手を止めても、僕は動くことができなかった。

「どう？」

ヒカルは、とくに得意がるふうでもなかった。

「すごいよ、なんていうか……すごい」

僕は、自分の気持ちを伝えられるだけの言葉を出せず、すごい、だけを繰り返した。それだけ

でも、僕がどれほど衝撃を受けたのか、ヒカルには伝わったようだ。

「んふふ、ありがと」

うれしそうに、そして少し恥ずかしそうに、ヒカルはうつむいた。

「本当にすごいよ。ギターだけじゃなくて、三線も弾けるんだね」

「んー、ていうか、言ったさ。じいちゃんが弾ける人だったんだよ。もう、死んじゃったけど。

それで、わたしが最初にさわった楽器は、三線だったの。ギター始めたのは高二だから、わたしにしたら三線も弾くじゃなくて、ギターも弾くって感じかな。」

三線の胴をなでながら、ヒカルは言った。

「そう、なんだ」

僕はヒカルが、これほど三線を弾けるということを知らなかったし、勝手に三線にはさわったこともないものだと思いついていた。音楽が好きで沖縄に生まれながら、三線を弾いたことがないなら、僕でも『勝負』できるかもしれない。そんな風に思っていたのだ。

「ま、最近はずっとギターばかりだったけどね」

教本をめくって、ヒカルは最後のページのページで手を止めた。

「ああ、これも載ってる。知ってるかな？」

そう言うとき、ヒカルは三線を弾き始めた。

さっきの安里屋ユンタとは違って変わって、ロックのギターのような調子で三線を弾き鳴らす。

ふざけてギターの曲を弾いているのかと思ったほどだ。声も民謡のものではない、いままで僕も

聞いたことのある、ヒカルの歌声だ。ライブで演奏するときの、めちゃくちゃなエネルギーにあふれたいつものヒカルの声。しかしその歌詞は、間違いなく沖縄口だ。何度も繰り返される『ヒヤ、ヒヤ』という歌詞。ヒカルのひびに置かれたテキストを見ると、ヒヤミカチ節とあった。かなり速い曲だが、たしかに沖縄民謡なのだ。いまは三番か、四番か、とにかく回を重ねることに、ヒカルは演奏を速めていく。僕は、その歌詞をなんとか聞き取ろうと、耳に集中するのだけど、『ヒヤ、ヒヤ』の繰り返しと『ヒヤミカチウキリ』以外には、『ウチナー』つまり沖縄、くらいしか聞き取れない。そうやって、耳を澄ましていると、突然『パシフィック』という言葉が、ヒカルの口から発せられた。

「ば、パシフィック？」

驚いてヒカルの顔を見ると、ヒカルもにこにこ笑いながらうなずいた。しかし演奏も唄もやめず、そのままさらに一番唄った。番を重ねるごとに速めた演奏は、ロックというより津軽三味線の速弾きのようになっていた。

最後の何音かをゆつくりと弾き、ヒカルは演奏を終えた。これも上手かった。速弾きしても演奏がぶれず、民謡とはまた違った、エネルギーの塊のような声も終わりに近づくほどに音量を増し、よどむこともなかった。そして安里屋ユンタのときは、ヒカルが三線を弾けることに驚いたが、こんどはたった一つの単語が気になってしょうがなかった。

「どう？」

ヒカルは、今度は得意満面といった様子で僕を見た。

「すつごく、上手だよ」

「んー、んふふふ」

またヒカルは、照れてうつむく。

かわいい。いや、それよりも。

「いま、パシフィックって言った？」

まともに聞き取れた少ない単語に、明らかに異質な言葉が混じっていたのだ。当然気になる。

「うん、言ったよ」

当然とでも言いたげに、ヒカルは顔を上げた。

「この曲って沖縄民謡だよね？」

「うーん、そういう呼び方も鳥唄とか、琉球民謡とかいろいろあるけど。そうだよ。ヒヤミカチ

節っていう曲」

ひざの上のテキストをこちらに向け、ヒカルは指し示した。さっき見たとおり、ヒカルの言う

とおりの曲名が、大きく書かれていた。横に添えられている歌詞には、たしかに『パシフィック』

の文字も見える。

「それなら、なんで英語が入ってるの？」

「ああ、そういうこと。この曲はね、結構新しいんだよ。戦争が終わって、それほど経たないこ

ろに作られたんじゃないかなあ。」

新しい、それだけではなんだか納得ができなかったが、まあ、わからないでもない。

でも、英語が入っているのに。

僕の納得しきれない表情を見たのだろう、ヒカルは続けた。

「まあ、いいたいことはわかるよ。民謡なんて言うのに、英語が混じってちゃおかしいよね。わたしもそう思ったことあるし」

「そう……だよ。いや、本当に驚いたよ。ヒカルの沖縄口をがんばって聞き取ろうとしてたら、いきなりパシフィックだったからさ、なんかおかしいなって思ったんだよ」

ヒカルが僕の疑問に同意してくれたことが、心強かった。

「でも民謡って、みんながうたう歌ってことさ。だから、新しく作られるわけだし、そこに他の言葉が入ってくることもおかしいことじゃないって、わたしは思うよ。戦争の後は三十年近く、沖縄はアメリカだったわけだし。それにいまの邦楽なんて、英語入りまくりさ。だから、おかしいって言うよりも、わたしにとっては新しい曲って感じかな」

そう言うのと、ヒカルは三線をベッドの上に置き、テーブルの上を指差した。

「ねえ、その牛乳もらったいい？」

声を出してのどが渴いたのだろう。コップには牛乳が三分の一ほど残っているだけだったので、僕は牛乳を足そうと、パックに手を伸ばした。

「そのままでもいいよ」

僕はパックを戻し、ヒカルにコップを渡した。ヒカルはのどを良く潤すように、牛乳を少しずつ含んでは、何回にも分けて飲み込んでいく。味わうというよりも、のどを整えるために飲んで

いるのだ。

僕は、英語の歌詞が、どうしても気になる。琉球民謡なのに、沖縄口でなく英語が入っていると、ヒヤミカチ節が沖縄の唄として偽物であるように思えてしまう。それを言うなら、僕はどんな唄が沖縄の本物の唄であるのか知っているわけではない。でも、まわりの環境で形が変わってしまうなら、それは本来の姿ではなく、代用品に過ぎないんじゃないか？

牛乳を飲み終え、僕にコップを渡しながら、ヒカルは言った。

「ほんとはね、ヒヤミカチ節って、もつとゆっくりした曲なんだよ。最近の人は、どうしても速く弾いちやうんだって。そういうわたしも速く弾くのが好きなんだけど、本当はこのくらいなの」
またヒカルは三線を持ち、こんどはゆっくりと弾き始めた。同じ曲であることは確かだが、リズムはさつきよりもずっと穏やかで、ロックのような印象はほとんどない。僕も何の抵抗もなく民謡であると思えるほどに、その曲調は沖縄のものだった。

しかし、一番の終わりにさしかかったとき、僕が背にしている壁が、コンコンと叩かれた。ヒカルはびたりと演奏をやめた。

「うるさかったね」

そう言うのと、ヒカルはテキストと三線をケースに戻した。時計を見れば、まだ七時半。楽器の練習をするには早すぎるし、それに良く響くヒカルの声に加われば、ちよつとどころではない騒音だ。

「たしかに、けつこう大声で歌ってたよね」

ささやくように声を小さくして、僕は言った。

「どうしよう。わたし、お隣にあやまって来たほうがいいかな」

ヒカルも同じようなささやき声になっている。

「いや、まだ寝てて、それで、うるさいって叩いたんだとしたら、玄関先まで歩かせちゃうのも悪いよ」

「そっか。そうだね」

「それと、こんな小さな声じゃなくても、たぶん大丈夫」

「そっか、そうだね」

ヒカルは繰り返すと、声の調子を戻した。

「でも、残念だなあ。三線を弾いてもらおうと思ってたのに」

内心飛び上がった。ヒカルに、ゴミ箱の爪のことを見透かされているはずはないのに。なるべく平静を装いながら、聞き返した。

「弾かせるつもりだったの？」

「うん。わたしが弾いて、その流れではない、どうぞって。ごく自然にね」

「いや、本当に下手なんだから、勘弁して」

僕は両手を胸の前でふって、言い訳した。まるで、ヒカルの演奏の後に弾けるわけがないとでも、受け取ってくれるように願って。

「だから、下手でも笑ったりしないよ。練習も兼ねて、ね。わたしだって、始めたときは下手く

そだったんだから」

笑いながらヒカルは言った。

その、始めたとき、ヒカルは何歳だったのだろう。始めたときには下手だったなんて言葉は、まったく慰めにも励ましにもならない。

「じゃあ、ヒカルは何歳から始めたの？」

「ええ……と、たぶん年少さんだったから、四歳か、三歳かな」

大ベテランだ。それほど小さい頃からやっていたのなら、三線のあの腕前もわかる気がした。

「それは、自分からすすんで？」

「最初はね」

「どうして、やりたいと思ったの？」

「あれ、話題変えようとしてる？」

ヒカルは笑いながら言ったが、それは僕には、自分の弱みから目をそらしていることを、しかりつけているように見えた。

ヒカルが三線を弾くときには、ゴミ箱の爪のことなんて、すっかり忘れていたのに、自分が弾くという話題になったとたん、僕は罪悪感に押しつぶされそうだった。僕はヒカルの知らないところで、ヒカルが一番大切なものを踏みにじっていたのだ。今すぐゴミ箱の底から爪を救い出し、よく洗って、柔らかい布で拭かないといけない。それなのに、そのヒカルに知られたくない一心で、僕は動くことができなかつた。

「……うん、でも、ヒカルのことを聞きたいなってね」

「まあいいけど。えっとね、言ったと思うけど、じいちゃんが三線弾く人だったさ」
「うん」

「それで、ちっちゃい頃に、じいちゃんが三線弾くの、カッコいいなと思って。教えてってたの
んで。それで、だったと思う。ちっちゃい頃はさ、三線がこんなにおっきいわけ」

ヒカルは両手を広げて、コントラバスを弾くようなしぐさをした。

「持つだけでも大変だし、絃を押さえるにも棹に指が回らないし。それでもがんばって練習して、
じいちゃんもほめてくれて。うれしかったな」

少しうつむいて、ヒカルは言葉を切った。何かを思い出しているのだろう。本当に、ヒカルは
三線が好きなのだ。それほど好きなら、どうして三線から離れてしまったのだろう。つまりは……

「ギターを始めたのは？」

「えっとね。それも、じいちゃんだよ」

「ヒカルのおじいさんは、ギターも弾けたの？」

「そうじゃないよ、じいちゃんは三線しか弾かなかったけど、本当に上手かったんだよ。いまま
多分、三線のお店にいくとテープが売ってるんじゃないかな」

「テープか……プロだった？」

「演奏会もほとんどしなかったらしいし、生活できるほどってわけじゃないけど、けっこう知ら
れてる人だったみたい。でもさ、いつも一人で、離れて三線弾いてるの。幼稚園の頃って、夜は

どうしても眠くなっちゃうでしょ。でも、中学くらいの年になると、夜更かしとかするじゃない。それで、夜おそーくに部屋の窓を開けると、離れのほうからじいちゃんの三線の音がするんだよ」

「それで、すごすぎて、ついていけないと思った……とか？」

「うん、がんばってついて行こうと思った。だから練習もしたし、じいちゃんの弾き方は、全部盗んでやろうと思ったよ」

「それなら、どうしてギターに？」

「うん、わたしが高校に上がってから、それまでよりもっとじいちゃんの練習量が増えてさ、もう朝から晩まで、すごい勢いで。わたしも高一の夏休みは、ずっと隣でまねしてた。でも、夏休みの終わりに、じいちゃん倒れちゃって、そのまま。でね、じいちゃんわたしにあやまるんだよ。最後に教えてもらったの。じいちゃんは、じいちゃんのじいちゃんから三線を教えてもらったんだって。でも、じいちゃんのじいちゃんは、じいちゃんが十になる前に、死んじゃったんだって。じいちゃんの父ちゃんも同じ頃にね」

「それは……」

「うん、戦争だよ。それでも、じいちゃんは、じいちゃんのじいちゃんが弾いていた三線の音が忘れられなくて、いろんな人から三線を習って、一人で練習して、でも、だめだったんだって。結局、やればやるほど遠ざかるんだって」

「ヒカルのじいちゃんは、すごく三線が上手かったんだよね」

「そう。でも、だめなんだって。わたしが高校に入ってから、それ以上に練習を増やしたのは、

わたしに教えたかったんだって。じいちゃんのじいちゃんが、どういう風に三線を弾いたのか。それが教えられなくて、ごめんって」

「でもさ、ヒカルも三線上手いじゃん。ぜんぜん、下手だなんて思わないし……」

僕の言葉を、ヒカルはささえぎった。

「上手いとか、下手とかじゃないんだって、じいちゃん言ってたよ。でもさ、それってひどいよね。練習してるじいちゃんが好きで、じいちゃんみたいに上手くなるうって、目標にしてがんばってたのに、あやまるなんてさ。教えられなくてごめんってことは、わたしがいままでじいちゃんからもらった弾き方は、じいちゃんにとっては偽物だったってことでしょ」

ヒカルの目の端には、少し涙が浮かんでいる。

「いや、そういうことには……」

「なると思ったんだよ、あの頃のわたしはね。で、三線さわれなくなっちゃってさ。でも、離れるのももう無理なくらい、音楽が好きになっちゃってさ。友達に話したら、バンドに誘われて、ギター弾いたら楽しくて。ってことだよ。牛乳ちようだい。なんだか、のどかわいちゃった」

僕はコップに牛乳を入れた。ちようど紙パックは空になった。

コップを渡しながら、僕は言った。

「なんか、話させちゃった……ね」

「ん、まあ結局は、楽しいから弾いてるの。ただそれだけ」

猫がミルクを舐めるように、ヒカルは少しずつのどを潤す。飲み方まで、唄のためになっ

る。

「でも、ごめん」

「んーん、気にしないで。今が話すときだったんだよ。あ、でもね、三線とギター、どっちが好きってこともないんだよ。確かにギターは、わたしにとって三線の代わりだったけど、いまは、そういうんじゃないの。どっちも大切なもの」

ヒカルは牛乳を口にして、続けた。

「それにね、たまに、道で三線のケース持って歩いてる人がいるでしょ。ああいう人を見ると、好きなのと、こわいので、分けわかんなくなっちゃって、見ないようにしてたんだ。だから、さつき三線のケースを見つけたときは、すごいびっくりしたよ。何でこの部屋に三線があるんだろうって思った。でも、君が弾いてるなら、わたしもまた弾いてみようかなって思ったんだよ。だから、やっぱりわたし、好きなんだ」

ヒカルは、コップの牛乳の水面を見つめていた。

「あのさ、これだけ言わせて」

ヒカルは体を僕のほうに向けなおした。

「ありがとね」

耐え切れず、僕は顔を背けた。爪を捨てた僕は、なんて返事すればいいのだろう。僕の口から出たのは、もごもごと言葉にならない音だった。

かじりかけたトーストとオムレツは冷め、トマトとリングスは乾きはじめ、牛乳はヒカルが飲み

干してしまった。それでも、とにかく朝食をお腹に収めることはできた。僕は食べ終わっても、立ち上がることなく、ヒカルも、たまに三線のケースを見る以外は、所在なざげにしていた。開け放たれた台所と居間の窓を風が通り抜ける。風が吹くたびに、部屋に満ちたヒカルのおいが薄まっていくようだった。それとも、僕の鼻が、ヒカルの香りになれてしまったのだろうか？

しばらくしてアパートの表の道を、ゴミ収集車の鳴らすベルの音が近づいてきた。おもちゃのチャチャチャのオルゴールが、住民に燃えるゴミを捨てろとせきたてる。

なぜ僕は、爪を捨ててしまったのだろうか。なぜ爪は今も、ゴミ袋の底で、汚い水に漬かったままなのだろう。ヒカルの話を、もつと前に聞いていたなら、爪を捨てることはなかったんじゃないか。

ヒカルは持っていて、自分に足りない何かの、埋め合わせにならないかと始めた三線が、手になじむ前に、僕は爪を捨てた。三線を捨てる勇氣はなかった。僕自身を、三線を持ちながら、爪がなくて三線を弾けないようにして、弾かないことのいいわけにして、それで安心していた。もちろんそんなことをして、自分を許せるはずもない。だからこそ、爪を忘れることができなかつた。

そして、絶対に、このまま爪を捨てちゃいけない。

「ね、ゴミの車、来てるよ」

ヒカルも、収集車の音に気づいたようだ。ヒカルは腰掛けていたベッドから立ち上がると、ゴミ箱に手を伸ばした。

「待つて、僕がやるよ」

ヒカルの手からゴミ袋をひったくると、紙くずや生ゴミを掻き分けて、一番下の汚い、水っばいあたりを探った。

「何してるの？」

僕の奇行に、ヒカルはあつけにとられているようだ。

「いや、捨てちゃいけないものが入っていたはずなんだ」

玄関に向かいながら、ゴミ袋の底をかき回す。

わずかにヒカルの気配が残っていた部屋の空気に、腐ったゴミ袋の底のにおいが、膿のように広がる。

「捨てちゃいけないもの？ 空き缶とか？」

袋の一番底で、僕はついに探り当てた。人の親指のような形、すべすべとした感触。ヒカルに見せないよう、僕はそれを握りこんだ。

「いや、ライター……だよ」

「そりゃ危ないね、火がついちやう」

何も疑う様子なく、ヒカルは言った。

小山響平(こやま・きょうへい) / 理学部・物質地球科学物理系三年次

佳作

冬瓜

スブイ

玉那覇浩規

うり取り彼り取りなつきばし女童家ぬ見舞いす

——月ぬ美しや

よく通^{とお}つた守宮^{ヤール}の鳴き声に、青年は目を覚ました。

サツシ戸から差しこむ真白^{ましろ}の月光に天井は距離感をもつて見上げられ、頭の上にある御仏壇^{ウフチダン}は一種不気味さを秘めながら厳かに聳えていた。寝起きの五感^{ごかん}は、はつきりと目が醒めた所^せ為^いかは知らないが澄むように鋭く、この家に長年に渡り染みいった線香の臭いが特に鼻についた。

八十を過ぎた老人と今年度に成人式を迎える青年が寢床をとるこの小さな家の壁の隅で、人知れず守宮^{ヤール}が飛蜚蠊^{トビビウ}を食^はんだ。喰う者と喰われる者の体軀の大小にそう差が無かったのか、細やかな棘を持った濡れ羽と肢が、顎^{あご}に収まりきらないでいる。

「何が。一樹。寝んらんば？」

呼ばれた青年の隣に布団を敷いた祖父、新垣善吉は、体を向こうに向ける形で横になりながら、そのまま動かずに年相応のこもった声で孫に訊いた。

「んーん、今さっきまで眠ってたんだけど、急に目が覚めた。悪い夢でも見てたんだはず」

先祖父に御願し敬う尊御前の前で悪夢にうなされるというのも奇妙な話だが、一樹においては仕方のない部分もあった。青年は元々、母と弟二人と共に沖繩市宮の団地に住んでいたのだが、晴れて大学受験を突破し大学への入学が決まると共に、手狭であった団地から追い出されるようにして家族から一人離れ大学の近くにあるこの中城の祖父の田舎の家へ転がり込む事となった。

ここに来て一年にはなるが、以前とは全く違った生活、例えば和式の所謂ポットン便所や、猫の額ほどの庭に位置する建物と一つになっていない湯あみ所等の祖父の特別仕様に、一樹は未だ馴染めずにいたのだ。善吉の家は、田舎の中においても更に際だつて現代化されていない家だった。

「塩小しー清めるか。御願不足あらに」

「済むさー。それよりか外にジュース小でも買いに行つて気分転換してくるよ」

そう言った後、一樹はゆっくりと腰を上げ、布団から立ちあがった。普段主な出入口として機能している中前のサッシ戸は外から鍵が掛けられない為、御仏壇の抽斗から南京錠を取り出し裏口のある台所へ向かう。老人が目を覚ましている事は承知しているが、気持ち分静かに襖を開いた。

「気付きりよー」祖父のそびらから素っ気なく聞こえた。やがて成人を迎える孫だ。そんなに

心配する事もないと考えているのだろう。

(……畑ばかりのこんな田舎で、男の俺が一体何に警戒しろって言うんだ？ 怖いと言つても極稀にでるハブ位だろ……)

青年は内心ひとりごちながら、オッケーと短く返し建てつけの悪い扉を開いた。すぐ目の前には月明かりに鮮やかな苦瓜ゴウイが広がっていて、善吉手製のネットから垂れる疣いぼが列をなした幼い実と、ほつれながら触手の様に伸びた蔦は、何か魔物マジクの子供の様で妖しく艶やいていた。

田舎の夜は照明が無い為に澄み渡り、星々はまるでショウケースに鎮座する宝石の如く気高い光を、その持ちうる限りの美しさを放っている。昇り切った月は淡く輝き、その表情は地球と遠く離れてしまった自身を、決して報われる事のない恋に落ちた者に重ねている様で、そこには哀しみによる神秘的な恍惚があった。

普通通繩には自動販売機が五十メートルも道を歩けばひとつは見つかるといふ具合に多数設けられているのだが、中城のこの地域では二百メートル置きに一台くらいの割合である。暗がりの中に一台だけぼつねんと立つ販売機で、一樹はワンコインでスポーツドリンクを買った。小気味の良い音を立てプルタブを引き、飲み口ひたひたに波打つ透明な液体を、ゴクリゴクリと自分でも美味うまそうだと感じる喉音をたてながら飲んだ。夜中に外で飲むジュースの味は格別で、一樹は背徳めいた爽やかさにだいたいぶいい気持になりながら、近くの公民館のベンチに腰掛ける事を思いついた。不良達クワイヤンがたむろしていなければの話だが。

公民館の方に向かい、ベンチが薄らと見えてくる頃になると、なにやら人がひとり座っているらしい事に気付いた。暗がりの中遠目で分かりづらいが、どうも女性の様だ。まさか不良の一味だろうか、中学の頃に実戦空手で外人と腕を慣らしていた一樹からすれば煙草ふかしまくったガキの二・三人なんざ怖くもなんともないが、田舎で事を起こすと噂やら何やら後の方が恐ろしい。引き返そうかと思いつつもやはり相手が今は女しかないという油断からか、もう少しだけ近づいてみる事にした。しかし、近づいてみるにつれどうも様子が違っている事に気付く。まず、容姿が所謂ヤンキー娘ではない。それに加えて、彼女の口からは涎垂が垂れ、月の白い光を地面に向かつて真つすぐ反射し伸ばしていた。更に近づき目の前に立つと、小さく整った鼻から鼻垂さえ少しこぼれているのが見えた。だが、その娘の顔は息をのむほどに美しかった。変にいじくりまわされていないカラス羽のような毛髪は一本一本が自己主張をするかのように艶めき彼女の小さな顔の両縁を流れ、恐らくあまり陽の光を知らないであろう肌は清楚の極みであり、絶妙な細さと薄さの眉は、その下の大きく見開かれた瞳をより綺麗に演出していた。ただその視線は目前の一樹を透かす様な、彼方遠くを見ているとしか思えない程に虚ろであり、その様子は一樹がそれを見て一目で彼女が何らかの知的なハンディを負っている事を察するに十分であった。

一樹はその少女、というよりは女に、おそろおそろる声を掛けた。

「えーひゃー、お姉さんよ。こんな遅くからひとりでなにしているば。何か家の人は一緒じゃないの？」

「みーさーはさあ、冬瓜スライがいいなあ」

ああ、間違いない、この娘は知恵遅れだ。でもいったいどうしてこんな時間、こんな所に……などと青年が見ず知らずの女に困惑の表情を向けていると、突然視界に懐中電灯の光が舞い込み、それに遅れて中年ぐらいの女性の声が聞こえた。

「みーさー、みーさー」

みーさー、と呼ばれた目の前の女は声のもとの方を機敏な反応で振り向くと、片手をぴんつと張って状況にそぐわない朗らかな声で応えた。

「お母さーん、こーんばんわー！」

お母さんと呼ばれた、恐らく彼女の母であろう女性は人の親のみが持つあの優しい声調で、「夜から外出たら危ないから駄目ってあれ程言ったでしょ。さ、お家に帰ろう」

とまっすぐ彼女の腕を引いた。すると、彼女はベンチを発ちながら一樹を指差して物をねだる子供の様な表情で言った。

「この兄々ニニが冬瓜スワイくれるってよー」

「!?」

突然にしてもいない約束の話を振られて、一樹は一瞬不意打ちをくらったように驚きを隠しきれずにいた。するとその様子を見て初めて気付いたかのように女の母は青年に小さく会釈した。が、その瞳には訝しげな気持ちチが隠れている事は一樹にもよく知れて、彼は冷静なる苛立ちを覚えながらも、状況が状況な故の本能から来る弁解の語を乾いた口に紡がせていた。

「いやあ、道をたまたま散歩していたら、女性がひとりで居たものだから、何かあったのかと思っ

てですね……」

障害を持った女性が性的な暴行事件の標的となりやすいのは周知の事実で、このような月も真上に昇る夜、ましてや汚れているとはいえこの女の器量である。親が警戒するのも当然であろう。罪心が無いゆえに、青年は必要以上に頭の中を混乱させていた。

一樹の目をじっと見ながら右手を娘に握られた母親は、そんな青年の気持を知ってか知らないでか、この場の空気を断ち切るように包容力のある優しい声で言った。

「あいや、すみませんねえ。もう気付いてるかもしれないけどこの子、ちよつと病氣してるからさ。気にしないでね。今も勝手に家から出て来ちゃったわけよ」言いながら色褪せた群青色のチエツク柄のハンカチを取り出し、女の鼻を丁寧に拭う。

「はあ」

「そう言えばあなた見かけない顔だねえ。どこの子ね？」

「僕は西小イリケツウの孫ですね。最近お爺ジイの所に引越したんですよ」

一樹は家名ヤシナで答えた。中城の田舎に移る前は自分の家の家名ヤシナなど知りもしなかったが、ここに来て人に自分がだれかを尋ねられる度に、名字で名乗っていると田舎である為と同じ姓が多くて説明が二度手間になる事に気付いて、善吉ヤシキに家名ヤシナを訊いてそれで挨拶オムケをする術マカを覚えた。以前は考えられなかった事だが、ここまでくるともう慣れたものである。

「あーっ、はいはい。善吉さんのとこの。宜しく言つていてね。さ、みーさー、行くよー」

その娘の母親は我が子のお尻についた汚れをぼんぼんと叩くと、そのまま慣れた様子で手をつ

なぎもう一方の手に懐中電灯を握ってさっさと街燈の向こうの闇に消えてしまった。

「兄々、じゃあねー」

「あ、ああ。バイバイ」こちらをむかずに片手を振って去ってゆく彼女であるが、後姿だけを見るとまったく普通の姉々達と変わらなかった。中年のおばさんが若い娘の手を引張ってゆく姿は、夜遊びしているところを補導員に捕まった女子高生、といった方がしっくりくるようで普通の親子の姿には見えない。去りゆく娘の容貌にばかり目を取られていた事に気付いた一樹は、はっとして俯いてしまった。彼はもう十代も終わりかけだが、しかしまだ十代の終わりではない、それは若さに他ならない恥じらいであった。飲みかけのジュース缶がぐつしよりと汗を掻いているのが掌越しに感じられ、やがて寸陰の雫となって地面に束の間の染みをつくる。

翌朝、一樹は携帯電話に目を覚まさされた。アラームでは無く、メールの着信音が一樹を夢から引き摺り起こす。一樹の頭上で鳴り響く携帯電話のサブディスプレイには、「當間光」の字、彼の彼女の名前がけたたましく光っていた。

「あり、一樹。起きみ候ち」

「おー、おはよーお爺」

布団のすぐ傍にある卓袱台の上には、サラダ油の焼けた臭いと共にスクランブル・エッグ、スィッチの入ったトースター、インスタントの代安コーヒーが置かれていた。善吉の家は何もかも一樹からすれば前時代的な印象を受けたが、食事に関しては何処かアメリカじみたものがあつ

て、中々なお洒落であつた。朝ごはんの献立も大抵は今日の様な簡単な洋風のブレックファーストである。これは予測にすぎないが、おそらく、米軍統治時代の影響ではないかと青年は納得していた。沖縄の年寄り達は、アメリカ人の様にコーヒーをよく飲むし香水だつて付けたりもする。スクランブル・エッグにトマト印の真つ赤なケチャップをかけながら、一樹は恋人からのメールを確認した。何という事は無い、「おはよー」という唯の朝の挨拶のメールだった。だが、何でもない時に愛しい人からメールを送ってもらえることこそ本当の幸せであり、その温かな気持ちの中朝ごはんに集中したい気持であつたが、その気持ちを形にしなければ、つまりメールの返信を寄せないと恋人である光から強か怒鳴られる事となるのは経験済みであつたので、眠い目をこすりながらもメールを打っていた。

それを見ていた善吉は、鬱陶しそうな顔をして一樹を正した。

「えー、ご飯時まで電話ーいじらんけー」

「ごめん、すぐ終わらすよ。いただきます」

新垣家の朝食は普段会話が飛び交うという事も無く、ラジオから流れる砂っぽくて馬鹿に大きい音のニュースのみが食卓を支配していた。善吉の耳が遠いので話をするのがおっくうというのもあるが、一樹が低血圧で寝起きが悪いというのも一因である。だがその日は携帯電話の話から下つて珍しく少しばかりの話が広がった。

「汝やまた大学の内地ヤーの強者とゆんたくるそーんば？」

「ううん、違ふよー。朝から強者とメールするかやー。我の女どー。」

「やんばー？ あんしえー済むさ。我んやまた内地ヤーかと思つてよ。いいか、あつたー大和人と我達沖繩人んでいーからに一杯、一杯物ぬ考え方から何からどうく違とーぐとうよ、同志小なていーから大さ損すんどー」

語尾に微かな怒気すら孕む善吉の一言と劍幕に、一方一樹は慣れた調子で「はいはい」という風に祖父に相槌を打った。老体ながらも時折鋭さを見せるその瞳の向こうには、戦争の記憶と共にこびりついた内地の人達への憎しみがある。これは善吉本人からではなく門中の叔母から聞いた話なのだが、この老人がまだ少年であった時、つまり時世は太平洋戦争の真つただ中であるが、当時父を守備隊にとられ母とは離れ離れになつてしまつた善吉がまだ赤子であつた妹を背負つて部落の外れにある洞窟に隠れようとしたら、そこは本土から来た日本の軍人も潜んでいた洞窟で、鳴き声を上げて敵に存在を知らせてしまうかもしれない赤ん坊を嫌がった日本兵に入る事を断られた、というよりも拒絶されたらしい。それでも自分と幼い妹の命が懸かっているので必死に洞窟への避難を懇願した善吉は、あろうことか、その日本兵に銃の弾倉で頭を殴られて追い払われたという。その後は爆風やらの跳ね土で汚れた顔中に頭頂部から流れる血を滴らせながら、家に帰つて薄つぺらなボロ布団のありつたけに幼い妹と共に被さり、悲鳴ともとれる泣き声と恐ろしいもの達の爆ぜる音に囲まれつつもなんとかその場をやり過ぎたのだが、それ以来、善吉少年は大和を嫌いになり、今では禿散らかしてわかりにくくなつてしまつたが恐らく火葬場まで持つていかれるであろう大きな禿が頭に残る事となつた。

とはいつても、一樹の通っている大学は一応国立であり、全国から学生や先生がやってくる。

世の中には付き合いたいものがある以上、大学で上手く立ち回ってゆく為には内地ヤ^{ナイチ}とも上手く付き合っていかなければならない。お爺^{ジイ}の様な考えを正面から突き徹せるわけもないので、青年は善吉に対しても上手に対応していた。

「んー、気をつけるさー。沖繩^{ウチナンチュ}人の心や忘^{ワシ}りていならんどーや」

「やんどー、やんどー」

チン。という音と共にこんがり焼けたトーストが二枚、トースターから飛び上がった。一樹はその一つを取ると善吉に手渡し、もうひとつにバターを塗る。ざらついて乾いた表面にバターの油がいかに旨そうなツヤを食欲をそそる香りと共に広げ、そのまま熱いうちに口に運ぶと、パンの表面の香ばしい触感と薄らとした塩味、パンの柔らかな部分を喰いちぎる喜びが口中に唾液をひどく分泌させる。それを熱いブラックコーヒーで流し込みながら、

「そういうえばお爺^{ジイ}、この近所に障害もった子いるよね？」

「ん？ ああ、聡子^{ソウコ}なんかーな？」

善吉はパンを口に運ぶ動きを止め、ガラス扉から見える塀の向こうを指差した。

「あつたー家^ヤすぐあまーど。何が、汝^ヤわからんたんば？」

「おー」と応えて、昨日の事の話の続けようかと思つたが何とはなしに止めた。

「あれなんかも大概^{テイゲイ}大変^{ダイケン}どーやー。あつたーぬ娘^{ヌメ}……何^{ナニ}んで言^イいたがや……ああ、美沙ちゃんよ。あぬ女童^{ミヤラビ}も相当^{チヤウブ}重い頭病^{チヤウブ}みそーていーからによ、親^{ウヤ}ぬ聡子^{ソウコ}も一杯^{イチパイ}苦勞^{クワウ}そーたんはじどー」

「ふーん……」

案外素っ気ない返事をしながらも、一樹の頭の中にはあの女の子の事で一杯だった。そうか、あの子の名前上原美沙って言うんだ……。メールの送信が終了したのを確かに検^{あらた}めて、スクランブル・エッグの小さい欠片を箸でつついた。

その日の大学での一樹の最初の授業、つまり二限目は大教室で行われる文学の授業だった。一階の百人程度を収容できる傾斜のついた教室に入ると、いちばん奥、教室中を見渡せる角隅の席に光が座っているのを発見し、そこに向かつて歩いた。赤色のベリーショートヘアにＴシャツとジーンズを合わせただけのとてもラフな格好だが、それを上手に着こなしている姿はかなり魅力的で、そんな彼女を見る度に一樹は密かに鼻高々であった。

「おはよー、ごめんちよつと遅れた」

「ん、おはよ。っていうか朝メール返すのもちよつと遅くなかった？」

「んー……だったか？ 悪い」

青年のはにかむような悪気のない笑いに、光はやれやれといった様子で隣の座席に置いていた革製の若者向けの鞆をよけた。

「お詫びにお昼はおごるぜ？」

「そのくらいトーゼン。本当にあんたはしようがないなあー。もしかしてあたしのメールがないと朝起きれなかつたりするんじゃないの？」

「まさかー、そんな事ないよ。俺これでも長男だし。まあ、一応今日は光のメールで起きたけど

ね……」

「やつぱりなー！ もー、あんたは本当にひかるーがないと駄目駄目だねえ」

モーパッサンが日本の自然主義に与えた影響をたらたらと九十分流して、授業は終わりのチャイムを告げられた。ざわめく教室の人が引いていく流れに、一樹と光もまた巻き込まれていく。

雲ひとつの無い春の澄みわたる空に見下ろされ、アスファルトで舗装された学内の道を学生食堂へと向かって二人は歩いていく。

「んー、やつぱ俺には自然主義の文壇は良く理解できんなー」

「ああ、そういえばあんた前アナトールフランスの全集とか読んでたね。フランスの浪漫主義が好きなんだったつけ？ にしてもあんな古い本好き好んで読むとかアホかと思えんかったけど……」

「なんかー？ 人が一生懸命文学に励んでるのに馬鹿にしてー。しかも俺は浪漫主義だったってフランスじゃなくて日本のが好きなの。あれは谷崎の研究の為に読んでたばーよ。麒麟とか刺青とか、最高だろ。三田文学であるがにーする長井があんなに誉めてたんだぜ？」

「あー、はいはい、始まった始まった。小説バカが。文学って言ってもあんたのはただの趣味でしょ？ たまには本業の経済の勉強もやれば？ あんたレポート出してないでしょ。教授がなんか言ってたよ」

「あぎじえ、財政の？ だーるば？ まいったなあ、ノートタッチやつさ」

「経済専攻が文学に浮気心だすからこんななるばーよ。一応よ、やー女の事で浮気したら本当に地獄見るからな？」

まさかやー、とか言いながら話をしてるうちに二人は学生食堂に到着した。すると案の定、食堂は学生達で込み合いほとんど満席の状態で、三角巾を頭に巻きエプロンを掛けた中年の女性従業員、要するに食堂のおばちゃんがルール違反である席取りをしている学生達を注意して回っていた。

「あいやー、今日はまた特に一杯してるな」店内の人達の様々な動きに視線を揺さぶられながら、一樹は言葉を漏らすようにつぶやいた。

「どーするー？ 弁当買ってから教室で食べるね？」

状況を冷静に判断した光の提案に、青年は強く頷く。

「いい考えやっさ。そうするか。しかもその方が安くつくから奢る身としては助かるし」

それを聞いた光は思わず、というよりも意図された小さな溜息をついた。

「はあー、あんたよ。またいらん一言いつてからに。そんなーしてたらどっかで損するよ。悪い癖ど」

彼女の『損するよ』の言葉に、ふと一樹は今朝の善吉の言葉を思い出した。

内地やーと仲良くなるとどこかで損をする。勿論、善吉の大和への恨みだけではなく、孫への警告、悪い思いはしないしてほしいという心遣いでもあるのだろうか……。

今、目の前に広がる日常の一コマ。

そこには、どれだけの数の内地の人がいるのだろう。お爺はともかく、自分自身はどう思っているのだろうか。思えば、自分は大学で知り合った人達をお爺のいつも言う様に『大和』とか『大和風儀』とか言つて嫌がる事は無かつたけれども、積極的に関わるうとはしてこなかつた。今、隣にいる光だつて、元はといえば地元ドゥシツワイの同志小の妹だ。もしも、自分の生活上の利害に内地ナイチヤーが関係しなかつたのなら、自分も善吉の様にこの人達を嫌うようになってしまつていたのだろうか？

そう思うと、なんとなくこの場所に居る事が気まづくなつて、必要も無いのに時間を確認するために携帯電話をジーンズのポケットから取り出し画面を一瞥した。

「ん？ 一樹？ どーしたの？」

「ううん、何でもない。さ、二階で弁当買つてこよう」

光と呼ばれてとりあえず今なにをするのかを思い出した一樹は、光の肩を両手で掴みまわれ右をさせて、掌で軽く背中を叩き前へと進む事を優しく促した。それに続いて、一樹も階段を上つて行く。

「よーっし、代高ダイダカ弁当から買おうやっさー。あ、一樹、わかつてると思うけれど、お茶代まで弁当代に入るからね」

光の話す、そして自身の話す中途半端な琉球語であるウチナーヤマトグチにどこか自分を重ねながら、一樹は先程授業で使つた教室で彼女と共にお昼の弁当をつついた。

授業時以外はクーラーが点かないので、教室の窓は全て開け放たれ、そこからは蝉の鳴き声が

絶え間なく響いてくる。それは季節感に乏しい一樹にも感づかれた、暑い、暑い、夏の到来の音色であった。

善吉の家が位置する中城の田舎には、買い物をする場所が少ない。一樹が知っているだけでも、つまりその近所の人がよく使う店としては近場にある生協くらいなものだ。担い手がいないせいか、一銭商店イチセンヤもそうそう無い。沖縄では良く知られている地元スーパーの店舗もあるにはあるが、それは山の上に位置し、なかぐすく店とはいってもその近くの大学の学生向けの中城ナカグスクである。そういう訳であるから、新垣家の食糧の買い出しは大学帰りの一樹が行う事になっていた。しかし彼は料理の方ばかりつきしであったので、買い物は専ら善吉があらかじめ用意したリストによる。その日の夕方スーパーの駐車場に軽自動車を停めドアを開いた一樹の手に握られた買い物リストには、苦菜ニガナなどの野菜をいくつかと豚肉を少々、玉那覇黒タシナフアールや黒砂糖クロザラキといったお茶受け、そしててんぶらの文字がボールペンの達者な筆跡で刻まれていた。てんぶら上戸ジョウケだが家が油アンダで汚れてしまうのを嫌って揚げ物料理を一切しない新垣家にとってこのスーパーの惣菜コーナーはもはや無くてはならない場所であったので、買い物リストにはいつもてんぶらの字が躍る。具は一樹の気分次第だ。

カートをひっぱり主婦に続いて二つ目の自動ドアを抜けると、まっすぐには野菜コーナーが伸びている。よく見ると、というよりもよく見るまでも無く堂々と並べられているのだが、その一面には青々とした冬瓜スイイがでつぷりと俵の様に並んでいた。スープに炒め物、果てはパイナップル

ケーキの餡の傘を増すのにまで幅広く使われる冬瓜は、まさに沖縄料理の大関というのに相應しく、時期にもなると誇らしげに野菜売り場の一等地を占有して他に譲ろうとはしない。

「あ、冬瓜スプイやしえ」

夕時の賑わいを見せる店の中ではおそらく誰にも聞こえないであろう小さな声で一樹はつぶやいた。一見間抜けそうに変わったその表情の裏には、あの娘と出会った夜の記憶ががありありと呼び起こされ再生されていた。みーさーはさあ、冬瓜スプイがいいなあ、と。今にも実際に聞こえてきそうだと思った矢先に、自分の口からいつのまにかその語が零れていた事に気付いて、青年はあたりを一人、焦りながらもこつそりと見回す。当然のことではあるが、誰も一樹を見てはいなかった。が、それでも誰かに見られたような気がしてならなかった一樹は、とりあえず積まれた冬瓜スプイのなかから、特に濃い光沢のある緑色の皮につつまれたひとつを取り出し、カートの籠に乗せた。カートを進めたり止めたりするたびに楕円形の実がごろん、ごろんと籠の壁にぶつかるのを把手に感じながら、残りの買い物リストを消化してゆく。

やつと戻ってきた車の中で、一樹は渋い顔をしながら冬瓜スプイをマイバッグから取り出した。改めて手に持ってみると、その実はずつしりと重く、産毛の感触もその味を保証するように頼もしく、なかなかの上物であった。が、それを評価する彼の表情は満足気なそれでは無かった。

「あげー、ちゃーすがや……」

何故必要のない冬瓜スプイなんか買ってしまったのだろうか。完璧な衝動買いだ。こういう時、一樹は自分の親父を思い出す。幼いころにお袋と離婚した、善吉の息子でもある、あの親父だ。離婚

の原因はパチンコと浪費癖であつた。もしかして自分も親父の血が通うだけあつてあいつと似たような性質を持つてゐるのではないだろうか……。そう思うと、いつも心が塩小かけたナメクジのようにしょげてしまふ。

力なく、冬瓜の硬い皮をポンとたたき、中身の詰まつた、汁気の多い音が小気味よく実の中に響いた。

一樹が買ひ物からそのまま真つすぐ家に帰ると来客がいた。狭い家の中、どつしりと構えた御仏壇の前で善吉と何やら談笑してゐたのは、あの夜見た娘の母、上原聡子であつた。

「おー、一樹。帰たんな」

「ただいま。なんでー、今日はお客さんがいるねー」

「おお、こちらーや上原さんやんどー」

「こんばんは。一樹くん。……はじめまして、じゃあないよね」

「どうも、こんばんは。なんか覚えてもらつてみたいですねえ。よかつた」

「何が。汝達知人やたんば？」

「そうなんですよ、新垣さん。実はですね……」

といつて、聡子はあの夜の出来事を善吉に話した。出来事、という程の事でも無かつたが、なんとなく一樹は悪い事を先生に告げ口されている時のようなあまり好いものとは呼べない汗を流しながら、キッチンへと向かい買った物を片付けた。しかしそのような汗をかけたのは、或いは

夏の入りの暑さに少しばかり反応し過ぎた体のせいなのかもしれない。その証左に、一樹が居間に戻った時、聡子の話の内容は一樹を誉めるようなものであった。

「困ってそうな人に声もかけられる、心の優しい兄々ニニですよ、一樹君は。今の若い子ーなんかにしては礼儀もただしいですし」

「んじ？ やんばー？」

善吉がからかうように一樹に訊いた。それは一樹の幼いころからよく見る微笑をとまなう、孫などの自分の親族を良く言われた時に発する、照れ隠しの問いだった。

一樹は「勿論さー！」と胸を張ったが、三人はそれが一種のお道化トケだと知っていたので、その場は温かな笑いによって満たされた。

「そう言えば、」

おもむろに一樹は座を立ち、台所に向かい、片付けかねていたビニール袋から冬瓜スライを取り出した。

「これ、大学から貰ってきたんだけど、上原さんなんか貰いますか？ ほら、こないだ、『みさ』ちゃんでしたっけ、冬瓜スライがどうのこうのとか言ってたから、丁度いいやつさと思って……」

農学部先輩がどうのこうのと有りもしない嘘を並べて、一樹は取り出された冬瓜を聡子の方へやった。深緑の立派なそれを受け取りながら、聡子は驚いたように、

「あい、こんな上等冬瓜スライ、貰っていいの？」

「ええ、どうぞ。どうせ貰い物ですし。ねえ、お爺オジ、いいよね？」

「おお、全然OKよ。汝がる持ちよーたんぐとう。上等さー、聡子。持ちよーけー」
「ありがとうねえ、みーさーも喜ぶはずよ。ごめんねえ、あの時みーさーが言つてたの、ちゃんと聞かれてたんだねえ」

そろそろ夕飯の支度をしなければならぬという事で、聡子は善吉と一樹にもてなしと冬瓜のお札を述べ、帰って行った。その後で、善吉が味噌汁を沸かし、それを冷蔵庫に入っていた善吉特製の大根の漬物と共に、一樹の買ってきたてんぷらをメインディッシュとして平らげた。酔海若天ぶらが一番美味しいな、と、一樹は思った。それを知つてかどうかは知らないが、どことなく機嫌の良い彼の祖父は心なしか芋てんぷらばかりに箸を伸ばしていた。小皿のソースに滲む油が大きなひとまとまりになる位、一樹と善吉はてんぷらを平らげたのだった。

それからというもの、一樹は上原家と仲良くなり、頻繁にその家に入出入りする事となった。夕方ごろになると予め上原家へ電話を入れておき、屋敷に着くと三十分ほど他愛もない話をする。その度に一樹は善吉の作った野菜や漬物や料理を持っていき、帰りは聡子がいつも多めに作つて余らせていた夕食のおかずを持って帰った。上原家もまた新垣家と同じく聡子と美沙の二人暮りであったので、一樹は上原家で夕食を御馳走になるという事は無く、貰ったおかずを家に帰ってから善吉と二人で食した。その際に使われたタッパーは、次に一樹が上原家に向かう事となる口実ともなった。

聡子とも打ち解けるようになって、美沙と仲良くなるのも時間の問題だった。もつとも、彼女

は出会ったすべての人に対して開けた感情をもつてはいた、というよりは警戒の感情を持ち合わせていなかったが。

大学の駐車場に停められた車の数は減り、大学近辺を若葉印のステッカーを貼った車両が多く走るようになってきた中だるみの頃にも、一樹は相変わらずタッパーと返札の野菜とを持ち上原家を訪ねていた。

聡子が台所に立ちリビングを外している間、一樹は美沙と共に幼年向けアニメの絵柄のプリントされたパズルを解きながらお喋りをしていた。しかしその会話は他人から見ればおおよそ言葉のキャッチボールとは言えない無味の砂を噛むような言葉の遣り取りであった。

「兄々、空がオレンジオレンジしてるね」

「だあるや、綺麗過ぎてなんか美味そうやっさ」

「みてみー、オレンジ色だよ」

「おお、見てるよ。もうすぐ夜だな」

「兄々、空がオレンジだよ」

そういった中身の無い会話であっても、一樹は彼女と過ごす時間をととても大切に思っていた。

純粹すぎる、何の面白味も無い彼女の心はまるで存在しないかのように青年には触れられる事は無かったが、たとえ触れられなくとも、彼女のその心の無垢さに心が洗われるような、そんな気分は一樹はなつた。だから、彼女の鼻垂や涎垂を拭うのは彼にとつては世話を焼いているとか、そういう動機からくる行為では無かった。彼女の形の良い鼻をかんだティッシュペーパーから粘

液が手に不意に付着するようなことがあっても、不思議と不快な思いはしなかった。むしろ、彼女の体から流れたその液体は清いものであつて、それを不潔とするのは己が心の不浄さを露わにするだけにすぎないとさえ考える様であつた。

丁度一樹が美沙の鼻垂を取つているときに、聡子は居間に入つてきた。

「あいっ。ごめんね、一樹君。美沙の鼻までかませてからに。手洗つてから、林檎、切つてあるから食べてね」

というその手には透明なガラスの器に盛られた林檎があつた。動物の顔のついたプラスチックの楊枝がカットされた瑞々しい実に三つ、刺さつていゝる。

いやあ、別にいいですよ。と言う訳にもいかなないので、一樹は台所を借りて水だけで手を洗つた。居間に戻り、「すみません、いただきます」と言つて赤いほうの楊枝を選んで林檎を頬張つた。美沙は先に緑の楊枝を選んでゐた。緑が好きらしいのだが、案外冬瓜スライが好きなのもその色に由来するのもかもしれない。林檎をかじる音と共に、ごく薄く塩味を感じさせながらさつぱりとした甘みが汁気を散らして口の中に広がつた。美味しい林檎だつた。

今思えば、一樹にとつては上原家の面々と共に何かを食べると言うのは、この林檎が初めてであつた。青年は家に中城の家族を一人残している為、食事は毎回帰つてから取るようにしている。とすると、ある意味家族ぐるみでの付き合ひであるこの両家の面々に、意外にも同じ食事の席に立つ機会は一度も無かつた。

そこで、彼はふとある事を提案した。

「あ、そうだ。ねえ、聡子おばさん。今度うちのお爺も一緒に、四人でどこかにご飯でも食べに行きませんか？」

「あいやー、いい考えだねえ。でも……」と言って聡子は美沙の事を案ずるように一樹に目配せした。知的な障害を持った子を連れて外出する事が大変であるという事を承知の上でなのか、といったニュアンスの込められた合図である。障害者である愛娘を障害を持つている事を理由に自由を制限したくは無い、しかし、その思いによって母親である自分以外の人に迷惑を掛ける訳にもいかない……そういった葛藤が、聡子の頭を逡巡していた。

「大丈夫ですよ。美沙ちゃんなら僕も普段から慣れていきますし。それに、久しぶりに二人以上で食事できるから、お爺ジイならきつと『心配シウさんけー、任マカちよーき！』とかいって喜ぶと思います」

青年がそういうと、聡子の表情はわかりやすい程に朗らかなものとなり、娘に何か祝い事でも起きたかのような、そんな雰囲気を醸し出していた。

「そうねえ、そう言ってくれるんだつたらおばさん、助かるさ。勿論、美沙も、ね。……一樹君、ありがとうねえ。善吉さんにもそう伝えておいてね」

あまりの聡子の喜びように、一樹は一瞬興が醒めたというか、自分がまるで物凄い善人か何かと見られている様に思われて気が引けてしまった。自分の提案に本当に微かにではあるが後悔の念を覚えながらも、日程は来月の何日にするべきかだとか、どのような店であつたら美沙も共に過ごし易いか等、細かい事柄まで決めていった。しかし聡子も一介の主婦である、一旦外食の予定が決まると、まるで堰を切ったかのようにその事に関してあれやこれやと喋り出す。中年女性

の持つ力に圧倒されながら、一樹は美沙の様子を優しく見守っていた。肉体はどうに高校生、結婚も法的には許される歳である女が幼年向けパズルとにらめっこする姿はどこか素朴でどこか強烈な絵ではあったが、そのいびつさを一樹は美しい物として受け入れ始めていた。

そして上原家から帰ったその夜、一樹は食卓を善吉と二人で囲いながら、例の聡子と交わした約束の件について話した。夕方聡子に対して言った通り、一樹は善吉の承諾を、難無く受ける事が出来るものと信じていた。が、彼のお爺の放った一言は、その期待に大きく反するものであった。

「ならん。」

その一言で、一樹の提案は、上原家との約束は一蹴されたのであった。

「はあ？　なんでよ、お爺ジイ。いつもあんなに仲良くしてるんだから、一緒に食事くらいいいさあ」
「いいい。うんぐとうしーねーサトウチキオウ。近隣サトウチキオウや思い違いそーんどー。平生からぬ近所付き合いと家人集ヤニシユ同士ぬ付き合いでいからに違いんど。あんさーに、我ワシや『ならん』でいーあびーんばーよ」

「あげ、我ワシやー納得いかんよ。なんでー、家族同士の付き合いましたら何が悪いわけ？」

新垣家では普段ではあまり家族喧嘩は起きない。それは、一樹、善吉、双方ともに一世代の隔たりを置いてあるせいとお互いに気を使い譲り合っているおかげでもあった。善吉は一樹の為にとなると判断した時しか彼を叱りつけなかったし、一樹は一樹で普段から素直に祖父である善吉の言う事をよく聞くようにしていたのだが、その日は違った。一樹は善吉の言う事に対し反発を覚

え、珍しく喰い下がったのだ。

「お爺ジイの普段ユグドの言ユし事シトとう違チガとーしえー」

「……………」

善吉は黙った。一樹の言う事にも一理はある。いや、どちらが人の在り方として正しいかと言え、一樹の言う通りにする方が正しいのではあろう。だがしかし、この片田舎に住む老人にとつて、自分の孫は言い慣らされた正義を貫き通すには余りにも大切過ぎた。一樹の将来の負担となるようなものを取り除く事が、善吉にとっての正義だった。確かに聡子達上原家の事情を考えると、出来る限りの助け合いはしたいという気持ちはある。しかし、彼女らに余りにも深入りし過ぎると、今度はかえって一樹自身が彼女らに言い方は悪いが巻き込まれて重荷を背負ってしまう事になる可能性がある。それだけはやめてほしかった。それ故に、善吉はここで引く訳にはいかず、己が正しさを貫き通す必要があった。

「お爺……………」

「聞ナかに！」

善吉の一喝に、とうとう一樹はそれ以上何も言う事ができなかつた。そのまま黙って不満の意を表すために家を出ようかとも思ったが、そうするとこの祖父は一人残される事になり、その心こころ中ちゆうが一体どのようになるのかを察すると、行動への踏ん切りがつかなかつた。仕方なくやるせない気持ちを抑え、黙々と膳を進める事にする。そしてそれ以上何も言葉を練れないのは善吉としても同じであり、張り詰めたような空気の中二人は傍から見れば普段通りに食事の時間を終わら

せようとしていた。ただ、寡黙が常であるのには間違いがないが、その日の沈黙は二人にとっては間違いないが、その日の沈黙は二人にとっては頭の中に色々な声の錯綜する、煩わしい静けさであった。

青藻アライサの吸い物は疾うに冷めてしまっている。

善吉と一樹は、以来会話の中でその件に触れる事は無かったが、しかし依然として一樹と上原家の関係は続いたままで、一樹はあの後も何度か上原の家へと上った。聡子と美沙の二人は例の約束をとてもしみじみにしている気色けしきだった。青年は結局、善吉の事を聡子に打ち明ける事が出来ないまま、その事を聞かれても体裁のいい言葉を言い繕って誤魔化し続けていた。

(ああ、我ワぬ愚かさよ、ちゃーならん……)

一樹は聡子や美沙と話す度にそう心の中で漏らした。

その日もいつも通りに美沙に絵本を読んでやる。青年の肩のすぐ横に置かれた頭の黒髪からは、微かにシャンプーの香りがした。物語の次の展開を待ちわびるその呼吸が、手に取るように感じられた。本の挿絵に向けられた眼差しはこの子と初めて出会った時のあたら夜の星空の様に輝いていて、それと己を対比する度、一樹は溜息をつく。勿論、「一樹イチキ兄ニイ々どうしたの？」と聞かれないように、彼女には悟られないようにしながら。

嘘物ユクシムネ言イハいしてもが裏切りはするなと一樹は幼少より善吉からよく言い聞かされてきた。ところ

がどうであろうか、一樹は今その裏切りをこの無垢な娘と彼女を愛する母親に対して行っているのではないか。本当の事を正直に言えば聡子も理解してくれるかもしれないが、それは青年にとつ

てはどのような告白よりも難しい事に思われた。

物思いは頭の中を這いずり回り、一樹は件の出来事を光に相談する事に決めた。

北谷チヤクサンにある有名なコーヒーチェーンの店舗で、一樹はその悩みを光に打ち明けた。

「ふーん、そんな事があつたんだ……」

「うん、俺どんなーすればいいかわらなくなつてよ……」

光は一樹の悩みに、懇切丁寧に応え、彼の事を理解した。きつと善吉は一樹の事を思うあまりにそういう少し冷たい事を言ったのだという事、変に善吉を除いた三人で予定を執行すればきつと聡子さんは傷つく筈だという事、約束は何か大学で急用が出来た等の嘘をこさえながら優しく断るべきだという事、そして約束を確実に反故にするためにその事は予定日の直前に告げるべきである事、等を普段とどとはまた違った真面目な目つきで助言したのだった。だが、一樹の心を揺さぶつたのは、いちばん最後に彼女の呟いた台詞であつた。

「——でも、ちよつとシヨックだつたな。ひかるより先に美沙ちゃん達を一樹なんかお爺ジイとのお食事に誘うなんて。私だつて一樹と一緒に住んでる家族と会つてみたいのにさ……」

一樹は恋人である光を、同居する家族である善吉に一度も会わせなかった事は無かつた。逆に一樹が光の両親に会つた事は何度かあるし、食事を共にした事もある。だが、一樹は何かと理由をつけて光と善吉の二人が合う事を避けていた。その訳は、光が一樹と同じ大学の学生だからである。

内地の人の多い大学で過ごす人達を、「大和風儀ヤマトフウジ」と言つて善吉は快く思わない。一樹に関して

は将来の事を思い大学に通う事を佚々承認しているが、それでも普段から内地の人に対する不評を一樹に対して浴びせている。そんな祖父が光に会ったなら何を言いだすか推して知れた所ではないので、今まで光にはあまり善吉の話はしなかった。

だが、今回の事で、一樹は光の事をすっかりと善吉に紹介するべきだと思った。そうしなければ彼女に失礼だと思った。最初の内は変な顔をされるかもしれないが、話し合っていけば、きっと善吉も彼女の事を認めてくれるに違いない。頑固で偏屈なお爺だが、いつまでも凝り固まった考え方で居て欲しくない。

(——世代を隔てた俺だから言うけど、お爺ジイの視界は狭すぎる、そして、お爺ジイが大切だから言えるのだけれど、俺の見る世界も知ってほしい。やしが、俺の物の見方の方が広くていいだなんて言ってる訳じゃない、俺だって考え硬いし、広い世界こそが良いついていう訳でもない。ただ、もうちょっとだけ、俺の事を知ってほしい——)

もしかするとその一樹の考えは、美沙に対して芽生え始めていたある感情を無理矢理押し込める為の唯の契機に過ぎないのかもしれない。だとすればそれは自分の弱さを紛らわす為の逃げ、転化、裏切りだ。だが、今の一樹にそれ以上の解を求めるのはあまりにも酷である。一樹の心を締め付けるものが全て大切な者への想いだと一樹自身が気付いた中で、唯一折り合いをつける事の出来る策は、己を悪とする外に無かった。この弱さが若さ故のものなのか、それとも人間であるが故のものなのかは、まだ一樹にはわからない。唯一ただ一つ確実なのは、ある決断が——例え周りから見れば些細な事であっても——当の本人にとって重大な決断であれば、それは決断者を大き

く前進させる、という事であり、この一樹の逃げも青年のこれからの長い人生の中では前へと進む一歩であるのかもしれない。

太陽の傾きが店内に差し込む色取りは、コーヒの薫りと話声を混ぜながら倦怠の相を呈している。そのような中にあつては背筋と共に視線をまっすぐ伸ばしている赤髪の娘は際立つて端正に映えた。そして、そこに相対する青年の瞳に一つ芯が宿ったように見えたかと思うと、彼は、「俺も大概馬鹿だからよ、そこまで考えてなかつたさ。ごめんね。」

と一言謝つた。

一樹は聡子と美沙との約束を破る事を決意したのだ。

『ごめんなさい、聡子さん、前から約束してた一緒にご飯食べに行こうっていう話だけど、その日ちよつと大学の用事が入ってしまったからに、行けそうにないです』

『あー、そうなんだ……。学校の用事だったらしようがないねえ。一樹君学生で忙しいもんね。残念さあ』

『急に断ってしまって、本当にすみません』

『んーん、いいよー。気にしないで、また次機会があつたら行こうねえ。みーさーにも言つとくさあね。』

『はい、ごめんねって伝えておいてください。また今度、冬瓜でも持つてきますよ』

『そんなお詫びみたいなの無くても大丈夫だよ。手ぶらでおいで！』

『ははっ、でもそれじゃあ美沙ちゃんが許してくれないかも知れませんよ。それでは、また今度』
『はいはい、じゃあねえ』

電話を切った矢先に、守宮ヤムルが一樹の目の前の壁を横切って行った。文字どおりに透き通った白肌こまこまに覆われた胸を気味悪く脈打たせ、手足を細々と跳ねるように動かす。箏たんすの隙間の暗がりに入って行くと、ケツケツケツケツと嘘ユケさーを嘲あざわらうかのようなきこえに鳴声をあげた。

玉那覇浩規（たまなは・ひろき）／法文学部・総合社会システム学科三年次

佳作

青年BBS

華井けい

目の前には、扉。

重たくて緑色に塗られたそれは、屋上へと続く扉。

私の手には、手紙。

今日の自殺予告を謳った、彼女の手紙。

『私は今日、死のうと思います。二号館屋上へ。』

『何だこれ?』『荒らし? 部外者入って来てる?』『まただよ、同じやつかな』『スルーしてください/管理人』『女みたいにていねいな字』『キレーに書いてあるってことは冷静に書いたのか? 本気で危ない系?』——『スルーしてください/管理人』

青年BBSは荒れに荒れていた。何度も間に挿まれた管理人のスルー勧告も効果がない。

私はため息をついた——いつものように無表情で。そしていつものように書き込んだ。

『スルーしてください／管理人』

そして長居は無用——さっさと夜間の授業へと向かった。

遠ざかって行く、夕日に照らされた黒板——廊下の奥にかけられた、今は使われていない元告示板。別名青年BBS——誰からも見捨てられたこの旧校舎の隅っこでいつの間にか始まった、ネット掲示板風の、チョークで書き込む畳二面ほどのアナログ掲示板。

参加資格・本大学の生徒である事。参加ルール・基本自由。規制単語は無いが、誹謗中傷恐喝は控える事。そして暗黙の了解として、書き込み途中の人に近づかない事、話しかけない事。この掲示板は匿名性の上に成り立っている。月一回、アカウント名有りの発言のみプリントアウトし、掲示板横のタンボールにて配布。

別名を、無許可サークル活動という。

そして私、錦城光は、数ヶ月前に卒業した従兄弟から業務を受けついだ、新管理人だ。

「俺は犯人を探すべきだと思う、例えただのイタズラだったとしても」

隣でバンズを焼きながら、又芳長潤は言った。彼の顔はピクリとも笑っていない、真面目なのだ。対する私の顔も無表情のまま。これは感情の振れ幅が狭いせいだ。

又芳は従兄弟の後輩——私が青年BBS管理に慣れるまでのサポート役だ。

「イタズラなのではと思いますか」と私は言った。「週一で、今日死ぬと書いてあるそうですし」——言いながら照り焼きチキンをひっくり返し、再びオーブンに押し込む。

「こういうのはエスカレートするのが常だろう」と、低くて落ち着いた声で返って来た。「今は掲示板の反応で満足しているからいいが、いつまでも管理人が無視をしていると、どうなるかわからないぞ」——首を振りながら、後ろでアラームの鳴った揚げ物を油から引きあげてゆく又芳。ポテトには素早く塩を振り、テイクアウト用の袋に三秒で詰めてゆく。

「最初に書き込みを見つけたのは、又芳さんでしたね」焼き上がったチキンをトングで引きずり出し、又芳が下ごしらえしてあったパンズにはさんでレタス・玉ねぎ・からしマヨネーズをトッピング。紙に包んでシールする。「それが五月頭でしたから——もうふた月続いていますか、自殺予告は」

「自殺せずにいてくれた、二カ月間だ」私から受け取った照り焼きバーガーをポテトと共に紙袋に入れ、口を二折りしてウォーマーの下に押し出す又芳。「もしも本当に自殺なんかが起こったら、俺もお前も、大学側もタダじゃ済まなくなるぞ——テリチアアップです！」

接客担当を呼びだすベルがチーンと鳴った。

そういうやり取りを終えて大学に来て見れば、まだ青年BBSは荒れていたのだった。

本日の記録担当である私は、授業が始まる前に青年BBSの発言を携帯電話のカメラで写し、その画像から勝手に文字が識別され文章化したデータを保存。最後にスルー勧告を書き込んだ後、

所要時間三分ほどでその場を去った。

犯人を探すべきだと思ふ——タダじゃ済まなくなる。又芳の言葉を思い出しながら、重いため息を吐きながら、私は教授の書く法律の解釈例をノートに書き写していた。途中、講義の板書もカメラで撮れたら楽なのに、と一度だけ雑念を浮かべた以外は、一心不乱にボールペンを動かしていた。

合計三時間の講義が終わった後、学校近くにある寮の自室へと向かう。省エネのために真っ暗になった大学敷地内を真っ直ぐ抜けて、歩き続ける。

普通なら怖くて回り道をしような、実際同僚は皆回り道をしている裏道を行きながら、そういうば例の書き込みがあるのは決まって火曜日なのだ、と思ひ出していた。そして月・水・金曜日担当の又芳が見つけるのだった。つまり、火曜日の夜遅く、私が記録を取る夕方以降に——もしくは、水曜日の朝八時に又芳が来る以前に、書き込みに来ているに違いなかった。

今日は木曜日。次の火曜日まで、あと五日。

おそらく又芳ははり込みを決行するつもりだろう——もちろん私も協力しないわけにはいかない。むしろ本当は私が進んで行くべきだろう。だが今まで自分から言わなかったのは、火曜日が個人的に決めた休日だったからだ。講義もバイトも入れていない唯一の休日で、又芳には実家に帰る日と言っている。この嘘がばれたなら、あの生真面目な男は深く静かに怒りそうだった。怒られたら面倒くさそうだなと思う。そして今回のこの自殺予告も、本当に起こったら面倒くさそうだなと思うだけだった。

寮母に会釈を返しながら、氣付いた。

そういえば、私に良心は無いのだった。

「光って本当に思いやりが無いよね」

不機嫌な顔を作りながらも、もう慣れたという態度をにじませながら、吉平とも香が言った。

ふんわりとした花柄ワンピースに明るく染めた髪が、金曜日の明るい学生食堂の雰囲気にもマッチしていた。すなわち完璧な女子大生だった。少しきつい目つきをしているが、十分に美人の部類に入る顔がじろつと私を睨みつけていた。

「……それで？」私はきよとんとして返した。ちなみに彼女の発言に対して怒りは湧かない。いつもの事だからだ。

「あたしさあ」かつかつと綺麗な爪で机を叩きながらとも香が言った。「ちょっとコピーしないといけない資料があるから、つまり十分くらい遅れるから、待っててね、ってメールしたよね」

「ああ、読んだよ」私は頷いて、それでも彼女の言わんとしているところが分からず再度聞き返した。「それで、それが？」

「それがねえ……」言うぞ、言うぞ、と彼女の小柄な体が膨らんでゆく。そして拳を握りしめて彼女は破裂した。「なんで先にご飯買って、ご飯食べて、ご飯食べ終わって、そして帰ろうとしているの！」

「ああ」私はようやく納得して、これなら説明できると安心して話し出した。「前の講義が十五

分早く終わったんだ」

しばらく沈黙が続いた。そして彼女が言った。「続きは？」

「続き？」私は首をひねった。長考に入った。「次の講義にレポート提出があるから、パソコン室に行つて、印刷して……」

「もういいわ。分かつたわ。もういいわ」とも香はため息を吐きながら席に座り込み、肩にかけていたカバンを放り出した。「幼馴染じゃなきゃ、付き合つてらんないわ。ふん、あんたみたいな人間、居なきゃいいのよ」

そして電子マネーカードだけを持ってランチを買いに行くとも香。彼女の暴言が聞こえたらしい隣の人がぎよつとした顔を向けるが、彼女は無視して歩いてゆく。その後ろ姿を見送つてから、私は空の食器を片づけて、一人で学食を出た。

その一連の行為に迷いは一切無かつた。とも香の言葉に怒りも戸惑いも抱いていなかった。頭の中は次のレポートの事を考えていた。

私はそういう人間だった。

いつからか私には感情が無かつた。他人の不幸話を聞いても、一切感情移入出来なかつた。でもその代わりに、誰かに憎悪を抱くことも無かつた。感情を抱ける対象が居なかつたからだとも思う。私の両親は健在だが、何故か私は祖母の家で、叔母と三人で暮らしているのだった。出戻りらしい叔母と私の母を嫌っている祖母の間では、はっきり言えば私の居場所は無く、小さい頃

に寂しくしていた記憶がうつすらとある。寂しくしていたということは、その頃はまだ感情があったのだろう。感情というのがどのようなものだったのかは、特にここ数年間から全く思い出せなくなった。

喜びとはどんな具合だっただろう。怒りとはどんな温度だっただろう。

痛みが無い代わりに、幸せも無い。その事が悲しいのかどうか、今はもう分からない。

「来週の火曜日の夜、はり込もうと思う」

こちらを見ないままに又芳が言った。土曜日の午後、不意に客が途切れて、備品の補充をしている時だった。私はテイクアウト用ケチャップを容器に詰めながら、奥の方でフライパンやボウルを洗っている又芳にしれっと返した。

「火曜日は、実家に帰らなければいけないんですが」

「無理にとは言わない」低い声に僅かに気遣いがにじんでいた。「だが、できれば、水曜の早朝には出てきてほしい。もしも何かあったら、見つけてくれる人が欲しい」

凄まじい温度差を感じた。又芳はこう言っているのだ。自殺に巻き込まれる危険を冒してでも自殺をとめに行く、と。素直に感心した。私にこの熱量は無い。

「はあ、分かりました……」頑張ってくださいね、と言おうかどうか迷っているときに、丁度カウンターとドライブスルー両方に客が入り会話はそこで途切れた。

雑音が混じるヘッドフォン越しに、ドライブスルーの客とやり取りをしながら、考える。

どうしても、死にたいなど言うのだろうか。

死にたいのなら、何も言わずに死ねるだろうに。

それなのになぜ犯人は、わざわざ人目にさらされる場所で、自殺を告知したのだろうか。本当は、死にたくないのだろうか。

そこでようやく私は気付いた。聞こえにくいのは雑音のせいではなかった。

「I'm sorry. I can't hear you. So, please come to the window.」

その日の夕方、バイトを終えた私はそのまま寮へは帰らず、学校の図書館へと向かった。二階ラウンジ横の広い自習室を何度か往復して、ようやく彼女の姿を見つけた。

何も言わずに彼女の向かいに座り、共同作成していたレポートの資料を広げ始める私に、向かいの席からため息が漏らされた。

「普通、挨拶とか、するよね。お疲れ様とか待たせてごめんねとか、特に意味は無いけどコミュニケーションの糸口になる挨拶を、普通はするよね？」

「そうなの？」私はあらかじめコピーしてあった資料を彼女に手渡ししながら答えた。「だって、とも香だって、何も言わずに自習していたじゃないか？」

「あたしはただ意地をはっていただけよ」資料を奪い取るようにしながら、とも香が言った。

「昨日のことだって根に持ってるし、今日のこともこれから根に持つわ。ふん、あたしは根暗なのよ。知ってた？」

「知ってるよ」今度はとも香が集めてあった資料を受け取りながら、私は頷いた。「こんなとき、何か言うと逆に怒らせることも知ってるから、後で飲み物でも奢るよ。スタバでいい？」

「いいわよ！」と言う割にはふくれ面のまま、更に八つ当たりのように資料がばさばさ広げられる。「ラージサイズよ、覚えてなさい。ふん、あんたなんてただのパシリよ、あたしのお財布よ」それから沈黙が続き、お互いが構築してきた理論を書き写し、自論とすり合わせる作業をしながら、すぐに三時間が過ぎた。時刻は午後八時になっていた。

「そろそろ終わりにして、ご飯でも食べに行こうか」と私が言うと、とも香も同意し、机を片づけ始めた。

このまま学外に出れば、帰ってくるころには閉門されて校舎には入れないことに気付いた私は、図書館の自動扉をくぐりながらとも香に許可を取った。

「青年BBSの方に寄ってから行きたいんだけど、いいかな」

「いいけど……」とも香は複雑そうな顔をしながら言った。「それって、あれよね、あなたが管理人をしてる、例の自殺予告で問題になってる……」

「知っていたの？」私は意外に思った。とも香が知っているは思わなかった。「まだ直接は見たことないんだけど。又芳さんが消してしまっからね。でも、たぶんイタズラだよ」

「そうよね……」とも香は不安げに瞳を左右に動かしていたが、すぐに誤魔化すような笑顔を浮かべて私を見上げた。「そうよね、ただのイタズラよね」

そして向かった青年BBSでは、多少荒れた名残が残ってはいたが、既に火曜日に書きこまれ

た自殺予告は流れており、普段通りの教員の悪口やバイト先でのセクハラ相談などの会話に戻っていた。

私はそれらをカメラで撮り、『ここまでログ取り／管理人』と書き込んだ後、いつも通りにその場を去った。

「イタズラといえば、あれはどうなったのよ」とぶつきらぼうにとも香が言った。私がタダ券でコーヒー代を支払ってから、ずっとこの調子だ。「何度も寮の部屋に手紙を入れてるって言うてたでしょ？ しかも白紙の。あの変なイタズラは無くなったの」

「いや、まだ時々あるよ」店員から勧められたフローズンシェイクをすすりながら答える。「でも白紙だし、何もないし、害はないし、とくに何も対策は取ってない」

「あなたって本当に……」と一瞬あきれ顔になってから、とも香は机を爪でかつかつと叩き始めた。「ドアのメールボックスに直接入れられてるんでしょ？ 部屋まで来られて直接イタズラされてるんでしょ？ それって内部の人間が犯人に決まってるでしょ？ それでどうして危機感が持てないのよ」

何と反応していいのか分からず、黙って飲み物をすすっていると、再びとも香のため息が漏れた。

そして寮に帰ってみれば、例の手紙が届いていた、というより、入れられていた。

メールボックスから拾い上げ、荷物を片づけてから、その手紙を再び手に取った。どこにでも

あるような白い定型封筒で、宛名や宛先は書いていない。のり付けもされていない封筒を開いてみれば、白い便せんが出てくる。どんなに目を凝らしてもそこには罫線だけしかない。

私はそれを今まで届いた手紙と一緒に束ねて、机の棚に戻した。

そして明日の早番のために、すばやく支度をして、すぐに寝た。

手紙には何も書かれていない。

自殺予告は決行されない。

私は誰も相手にしない。

私は誰にも相手にされない。

そして火曜日。私は寮の自室に引きこもり、休息を取っていた。

月曜の夜で水曜の準備は済ませたし、掃除洗濯はこまめに毎日行っている。火曜日だけはほんやりと過ごし、つつがなく日々を過ごしている。私はきちんと毎日を過ごさせている私に満足した。高校卒業後季節労働に出、一年間金を溜めた後、完璧に管理したスケジュールの自宅浪人で国立大学に合格し、奨学金とアルバイトで学費と生活をまかなっている。叔母からは、良い仕事につけないのなら大学をやめろと言われているので、このまま司法書士の資格を取るか、それより前から公務員受験を受け、合格すれば大学をやめて就職したい。約束通り、祖母の家に送金を行いながら、誰にもかかわらず自立した生活を送りたい。

毎週の火曜日と同じように、思考をまとめ直した後、私は再びベッドにもぐりこんで寝た。意識が無くなる一瞬前に、又芳の事が思い浮かんだが、そのまま目を閉じて眠り込んだ。

目が覚めた。汗がびっしりと顔じゅうに浮いていた。クーラーはいつの間にか消えていた。壊れてしまったのかもしれない。すっかり暗くなった室内に明かりをとまず。周囲に人の気配が増えていた。大学から帰って来た学生たちでにぎわっている。お風呂上がりの良い匂いが、ドアの隙間から漏れてきていた。もう眠れそうになかった。

時計を見ると、夜の八時になっていた。

私は少し考えると、汗をかいた服を着替えて、部屋を出た。

青年BBSの前に、又芳の姿は無かった。

私は拍子抜けした——掲示板の前で仁王立ちでもしているものと思っていた。だがすぐに間違いに気付いた。

携帯にメール着信。その文面を読み、背後の窓を見上げる。プールを挟んで隣に立つ三号館二階に、又芳の姿があった。

「来てくれたのか」ペットボトルの飲み物を勧めながら、又芳が言った。「ここからはよく見える。お前が来たのも見えていた」

「今日の分のログを写しに来ていたんですよ」受け取って、礼を言って、飲む。「今のところ、

自殺予告は見えませんでした」

「ああ、ずっと見張っていた」空き教室に散らばった私物から、双眼鏡を取り出して覗きこむ又芳。「こうやって、あそこに明かりがつくたびに見ている」

その本格的な姿に感心する。「……本当に、泊まり込むつもりなんですか」

彼の横顔は引き締まっていた。本当に泊まり込むつもりだった。

「……来てくれてありがとう」急に又芳が声を低くして言った。「お前は、なんだか変な奴だと思っていたが。今回も絶対に協力しないだろうと思っていたが、違ったようだ」

「はあ、そうなんですか……」付き合っただけは浅いが、又芳は私の本質をしっかりと捉えていたらしい。「すみません。誤解させて」

「いや、俺が悪かった」言っているうちに、顔が赤くなってきた又芳は、双眼鏡から目を離さないまま、逆にぶっさらばうに言った。「もう帰った方がいいだろう。ここは俺一人がいい。警備員が来た時、一人の方が逃げやすい」

「そうなんですか」その言葉を言葉通り受け取って、私はさっさと帰り支度をした。「それでは、また朝に」

暗い階段を降りながら思った。

やはり、私には良心というものが無いらしい。

翌朝はメールで起こされた。見ると七時を過ぎていた。本当は七時半には青年BBSに行こう

と思っていたので、これは寝坊だった。

携帯電話を見る。又芳からだった。

『自殺予告があった。目を離したつもりはないが、朝になって直接青年BBSを見に行ったら、小さく書いてあった。犯人は俺たちに気付いていたんだ』

私はため息を吐いた。そんなことより、八時半からバイトが入っている。自殺予告は又芳によって既に消されているだろうが、早く青年BBSの確認を済ませて、出勤しなければいけない。私はさっさと用意してあった服に着替え、顔を洗いに外に出た。

ひどく寝汗をかいていた。間違えてか誤作動か、夜なかにクーラーが切れていたらしい。目だけは乾燥していて、ひたすら痒かった。

「どうしたの、その赤い目」と、先に出勤していた店長に声をかけられた。

「いえ、クーラーで乾燥したみたいで……」軽くかわして、すぐに開店準備に取り掛かった。店長はキツチン、私はカウンター周辺やホールを拭き上げてゆく。先に時間のかかるアイステイヤーやアイスコーヒーの準備、シェイク機器の消毒、それからホールを掃いた後積み上げられていた椅子を下ろし、テーブルを消毒してゆく。

最後に私が有線放送のスイッチを入れたとき、丁度店長も重労働な揚げ油の入れ替えを終了し、加熱を開始していた。この店には店長しか危険物の資格を持っていないため、誰もこの作業を手伝えない。

「ああ、疲れた。腰に来るね。もう歳だね」ようやくクーラーの効いてきた店内で、滝のように流れている汗をぬぐう店長。自分のコップに水を注ぐついでに、私にも勧めてきた。受け取って礼を言うと、にっこりと大きな八重歯を覗かせて笑った。

「どうだい、後輩、大学生活は楽しいか？」

ちなみに店長は私たちが通う大学の卒業者で、バイト経験なしに直接社員になったらしい。だから裏方の仕事も、接客も、中途半端に下手くそだ。

「はい。レポートとかが大変ですが」私は十分に蒸らしたティーに氷を投入しながら言った。

「あと、サークル活動が、最近きつくなってきましたね」

「両立は難しいよな」後輩を可愛がっている先輩顔で、店長が言った。「頑張れよ、若いころの四年間なんて、あつという間だぞ」

まだ二十代にしか見えない店長が、すでに後悔している顔で、私を励ましてくれた。

その時、ポケットの中で携帯電話が震えた。ちらりと覗くと、とも香からのメール着信だった。店長の手前取り出して見ることは出来ない。私はメールを無視した。

店は予定通り、午前九時に開店した。

その日の営業は私には特に問題は無かった。ただ、商業高校のアルバイト生が客の注文を取り間違え、直接客に叱咤された。キッチン作業に忙殺されている店長に代わり、私が代表として謝りに行くことになった。気難しい客だったが、私が地面に膝をつけて謝ると、あっさりと許して

くれた。失敗した本人である高校生の女の子は泣きじゃくり、私に謝ったが、私が「こんなことは慣れているし、なんとも思っていない」と答えると、更にショックを受けた顔をして、黙り込んでしまった。

その後キッチンの奥で、女の子は店長にバイトを辞めたいと申し出てしまった。私の答えの何が悪かったのかもしれないが、何が悪かったのかは分からない。

午後三時にバイトを終え、タイムカードを押して外に出ると、再び携帯電話が震えた。画面を見ると、着信十件に、メールが七通来ていた。全てとも香からだった。

『どうして電話もメールも返してくれなかったの』

電話越しに、怒りに震える声でも香が言った。私は戸惑いながらも言うべき事を返した。

「今までずっと、アルバイトだったんだよ」

『分かってるわよ……』とも香の声がますます震え、小さくなったり大きくなったりと不安定になった。『あなたが今日バイトだって、分かってたのよ……それでも、パニックになって、思わず連絡してた。あたしの家は遠いし、近くに居る人は、あなたしか思い浮かばなかった』

「一体どうしたの」私は歩いて寮に向かいながら、話し続けた。「話がよく分からないよ」

『ただの事故よ！』いきなりとも香が叫んだ。『ただの接触事故！ だけど相手の男たちが、なんだか柄が悪くて、いきなりあたしのせいにして、慰謝料とかを迫って来たから、怖くて車にもったの。そしたら窓を叩いてきたりして、怖くてたまらなかったの。それだけよ！』

「そうなんだ」私は相槌を返し、事故にあった時にまず取るべき行動を注意した。「ちゃんと警察は呼んだ？」

「呼んだわ。そしてもう終わったの。今はレッカーしてもらった先から代車を借りて、それで家に帰って来たところよ。もう、終わったの」

「そうなんだ」私は再び相槌を返した。「特に怪我も無かったんだね。気をつけなきゃ」

「……それだけなの？」電話の向こうからしゃくり上げる声が聞こえた。「それだけなの、あなた、それだけなの？」

何を言いたがっているのか、私には分からなかった。ただ彼女が怒っている事だけは分かった。だから言った。「今度、ゆっくりランチにでも行こうか」

「要らないわ！」凄まじい怒声が響いた。

「あなたなんて要らないわ！ 思いやりのかけらも無い、人間らしさがちつともない、友達だなんて思っていない。あなたは、ずっと一人でいるといいのよ。子供のころは何とも思わなかった。あなたは普通に笑って、普通に怒ったわ。大きくなって、ちよつと性格が変わっただけだと思っていた。けれど違うわ。あなたは異常よ。ようやく分かったわ。あなたなんて……」

最後に振り絞るようにとも香は言った。涙まみれの、苦しい言葉だった。

「……あなたなんて、居なきやいのよ」

ぷつと電波は途切れて、それから、何も聞こえなくなった。

そしてあつという間に日にちが過ぎた。とも香を見かけることは一度も無かった。共通の授業にも、彼女は出ていなかった。やりかけのレポートだけが残った。

火曜日の自殺予告は続いていた。又芳がいよいよ青い顔になった。

「犯人は俺たちに気付いていたんだ。俺たちを逆に見張って、見ていない隙に書き込んだ。この犯人には執念を感じる。これは、引きずると危ない。後回しにするには、怖い」

青年BBSを休止にするかどうか、本気で悩み始めたようだった。悩んでいるのだったら、いずれ休止になるだろう。又芳は真面目な男だ。

その方がいいのかもしれない。バイトと講義を増やして、将来への備えにできる。

寮の部屋に帰れば、メールボックスには何も入っていないかった。

充電器にさした携帯電話には、誰からも連絡は無かった。

来週はレポートの提出だ。もう個人で意見をまとめて、仕上げるしかないだろう。

手紙には何も書かれていない。

自殺予告は決行されない。

私は誰も相手にしない。

私は誰にも相手にされない。

明日の火曜日には、また、例の自殺予告があるのだろう。

青年BBSが廃止されれば、又芳とのつながりも無くなるだろう。

とも香とも、このまま決別することになるのだろう。

その事に、何も感じる事ができなかった。

私は……人間である条件を、なに一つ満たしていない。

私は……本当に……？

ことん、と音が鳴った。

カーテンからは朝日が漏れていた。

私はうつすらと目を開ける。ひどく、いたむ、痒みを持った、重たい瞼だった。

私はそれでも起き上がった。

フローリングの床に足をつけて、立ち上がり、先ほど音がした方へと歩いてゆく。

メールボックスには白い手紙が入っていた。

指先ではさんで、拾い上げ、のり付けもされていない封筒を開けて、中身を開いた。

それは青いインクの文字だった。

『私は今日、死のうと思います。二号館屋上へ。』

目の前には、扉。

重たくて緑色に塗られたそれは、屋上へと続く扉。

私の手には、手紙。

今日の自殺予告を謳った、彼女の手紙。

私は少しだけ息を吐いて、それから、力を込めて扉を押し開けた。

真っ白な光景だった。朝日に目を焼かれ、私は一瞬うつむいた。じっと足元を見つめて、太陽の熱に温められながら、一步を踏み出した。

「遅かったのね、光」

ひかりの中から声をかけられた。彼女の声だった。私はまぶしさをこらえて前を見た。

彼女はいつも通りの、綺麗な花柄のワンピースを風に広げながら、私を見つめて言った。

「自殺予告をしていたのは、あなたね。光」

いつからか私には感情が無かった。他人の不幸話を聞いても、一切感情移入出来なかった。でもその代わりに、誰かに憎悪を抱くことも無かった。

「その手紙は、あなたの部屋に毎週届いていた手紙を写したものよ」

私の心は死んだのだと思っていた。

私の感情は消えたのだと思っていた。

「あたしは、レポートを届けに行ったの……もうあなたの顔なんて見てやるものかと思って。そうしたら、ポストの中に、例の手紙があった。私は勝手に開けた……白紙だと聞いていたから、思わず開けていたの。そしてその文章が書かれていた。字を見て、すぐに分かった。小さい頃のあなたの字にそっくりだった。綺麗で、ていねいで、一生懸命な字。今の簡素な機械みたいな字とは、まったく違うもの」

又芳はあの日、青年BBSから目を離してはいなかった。火曜日の夜、最後に青年BBSを訪れたのは私だった。

「白紙なんかじゃなかった。あなたに見えていないだけだった。青年BBSにも本当はあったはず。あなたに見えていないだけだった。感情を拒否したあなたには、感情で書かれた言葉は読めなかった」

手紙は白紙だった。

実際の自殺予告を見たことが無かった。

綺麗で、ていねいで、一生懸命な文字を書く彼女は、

小さい頃、さみしい思いをして、悲しんでいた彼女は、

生きていたのだ。心の奥深くに。

押しこめられて、悲しみのあまり、夜なかに泣いて、手紙を書いて、それでも気づいてもらえなくて、青年BBSに書き込みをした。

私は死のうと思います。

裏切られた心が、とても悲しいのです。

我慢しても報われないのが、むなししいのです。

気づいてもらえないことが、さみしいのです。

だから私は今日、死のうと思います。

二号館屋上へ。

私を、連れて行ってください。

「ねえ……死にたいって気持ちだが、どういう事分かる？」

とも香が言った。太陽を背にして、それは、私自身の姿に思えた。

私が殺し続けた、女性そのものだった。

彼女は泣きながら、それを無理やり手でぬぐいながら、私を見ていた。

「死にたいほど、生きたいってことよ」

私は手すりを乗り越えた。

とも香の悲鳴が聞こえた。

それでも分かっていたはずだ。

今日ここに呼びだしたときから。

自殺予告した本人がどうするか。

そして、どうして二号館なのか。

それを全部分かっているから、とも香は私に手紙を読ませてくれたのだ。

青い空が広がっていた。

どこまでも見渡せる気がした。

そして、私は落ちて行った。

——それから、激しい衝撃と共に水しぶきを飛ばし、着水した。

盛大に口に入ってくる水。塩素の味とたまらない息苦しき。上下不明で暴れてひっくり返って、ようやく太陽の光が見えて、私はその光に向かって一心不乱に上昇した。

重たい体、苦しい呼吸、鐘が鳴るような耳鳴り——もう我慢できないと思った瞬間、銀色の水面から太い腕が生えてきて私をひつつかみ、凄まじい力で引きあげてくれた。

「——お前は、何をやっているんだ、光！」

又芳の声——又芳の姿だった。咳き込んでいる私の体を、自分が濡れるのも構わずプールサイドに引きずりあげた。又芳に比べて細くて軽い女の体は、あつというまに運ばれて仰向けにされた。すぐ目の前に又芳の顔があった。真っ赤になって怒っていた。

「お前は、いきなり——手紙の写真を送って来て、自殺予告の文面と同じかどうか聞いたあと、

俺がそうだと返事をしたら直ぐに電話を切りやがって——もしかと思って来てみれば、何なんだこれは、一体！」

「……又芳さん」咳き込みつつ、私は言った。「私、生きていますか？」

「……当り前だろう。頭でも打ったのか」

又芳の呆れ声に、私は、たまらず笑いだした。腹筋に力が入らず、へんな笑い声だったが、それは確かに笑い声だった。

それと同時に悲しくなった。次には涙があふれてきた。

すると今度は悲しんでいることが理不尽に思えてきた。腹の底から怒りがわいて、コンクリートを拳で叩きまくった。とも香が塀を乗り越えてくるのが見える。又芳は私の奇行にどうしているか分からない顔をしている。

それから私は、心の底から、叫んだ。

「——どうだ、私は生きているぞ！」

佳作

歓喜の挽歌

菅谷 聡

僕を狂っていると言う者もいれば、それ以上に憐れな路上生活者だと見下す者もいる。誰が何と言おうと唯一自身で確信していることは、僕も単なる哀れな人間だということだ。だから、哀れな人間がその哀れさを耐え凌ぐには唄の一つも口ずさまなければ、本当に狂ってしまいそうになる。ところが無理解な人々はその「唄う」こと自体、僕が狂っている証しだと見なしてしまう。僕の唄は確かに一見しただけでは独白の時もあるし、ただ呟いているだけのように見えることがあるかもしれないけれど、そんなこと狂った者の特権ではない。ではなぜだろう、狂った者が近くにいなければ自分の正気を信じることが出来ないのだろうか。だとすれば僕はその人たちのために、昼夜を問わず唄い続けなければならぬ。そんなことしたって感謝もされないけれど、迷惑も掛かりはしない。そして、ついこの間なんかは唄の評判を聞きつけた街の議員―彼は恰幅よく街に降りるときもダブルのスーツを着こなして、顎髭は適度に整えられて常に自分の指より

長い葉巻をくわえていた――が自分の慧眼をアピールしてなおかつ自尊心も満たすために、僕を強引に口説いて無理矢理舞台に上げた。一応、納得したふりをして彼の自尊心を一時は満たしたけれど、さすがに僕の自尊心までは簡単に売るわけにはいかないから、そんなときは赤い絨毯の上で黙って不貞腐れてみる。観衆は最初どよめき徐々に「まあそんなもんだらう」と冷めた目で始める。しかしピアノの奏者は戸惑って、舞台の責任者は袖を不必要にうろつく。そして、最後に「僕の唄を聞いてくれてどうもありがとう」とだけ言って僕は舞台を立ち去った。僕は出番が終わってから帰るまで、彼らの慧眼の白い部分ですつと監視されたけれど、構わないで近くにあって缶なんかを規則正しく叩いていた。缶がようやく一定のリズムを刻み始めた頃、飽きたのか呆れたのか分からないけれど僕は楽屋から追い出された。そうして帰り道は激しくなった缶のリズムと共に唄って帰った。真夏の虫もコウモリもよく鳴く暑い夜だった。市民が本当に望んだのか分からない紳士然とした市民ホールから僕の家までおよそ二十分に渡る路上公演だった。その帰る場所の殆どは大通りから入った筋道の一角にある。表札も郵便桶もないけれども必要なものは手に入るし、尋ねてくる人もいる。僕の家はモダニストの建築家たちを喜ばせそうなほど「Less is more」に溢れていて、住み心地が良い。ちなみに年に数回だけ屋根のある家に行くこともある。むかしむかし、ある背の高い痩せた男が「お前に家をくれてやる」と言って僕にくれたものだ。そしてそこには屋根やトイレはもちろんのこと、現代的なキッチンやバスルームが付いて、さらに持ち主の趣味と思われるゲップが出るほど温もりが詰まった家具なんかで居間も寝室も溢れかえっている。しかし、生憎僕にはもっと素晴らしい家があるのでそこには本当に

年に一度か二度しか、台風の日すら行かない。それでも貰っておいて全くの空き家にしておくのも気持ち悪いので鍵を掛けずに開放している。遠慮のない猫なんかが一家、もしかしたら一族で住んでいる。たまに中から酔っ払いが出てきたりもする。

さて、今日も夜がだいぶ更けて車の排気音も疎らになってきた。こういう夜は路上演奏会にピツタシだ。観客は路地の間、石垣の隙間から僕の唄を心置きなく鑑賞する。拍手もなければアンコールも要求しないとても慎ましい観客たちだ。季節もだいぶ暮れてきて十分に一回は冷たい風が吹く。こんな夜はなるべく心も体も暖まる唄にしたい。だからと言って真夏をイメージするような馬鹿馬鹿しいほど暑苦しい唄では却って夢見が悪くなる。少しぬるいぐらいが丁度いい、熱爛だつて人肌ぐらいが一番美味しいでしょ。僕が感じた中で最もそのぬるさに近いのは産まれた瞬間だと思ふ。例えば誰だつて産まれてくるときは生温かさに包まれてこの世の外気に接する。それを基準にして風呂を調節したり毛布にくるまったりする。その幸福な温度を僕は幸い覚えている。ぬるい生の熱気を発していた頃を唄うことにしよう。

エイジュは、車がひっくり返ってキャンドルのように路肩に灯されていった、あの暑い冬の日
に四畳半の上に産まれ落ちた。彼はこの世の光をこの眼で確かめるよりも先に外から響く大人た
ちの怒号を耳にした。そしてそれに負けじと懸命に泣き叫んだ。しかし外の怒号はたった一人の
赤ん坊など意に介さないほど凄まじかった。大人たちでも無邪気に泣き叫ぶことがあるのだ。そ
して大の大人が集まってわめき散らせば冗談でなしに街が揺れるのだ。四畳半をも平気で揺らす

巨大なゆりかごの上に落ちたのだ。そんな中でも野戦病院で何百人もの赤子をこの世に引きずり出してきた歴戦の産婆は動じることなく母と彼とを一つの身から二つに引き離し、一切の感情を込めずにへその緒を切った。もう母の中に戻る道は閉ざされてしまった。彼の選択の余地など微塵も考慮されなかった、この世で生きるか否か、あるいはもう一度母の中に戻るか。しかしそんなことを考える以前に、砂糖の丘の上で鍛えられた老婆の職人技はエイジュに抵抗の隙を与えなかった。曰く「赤ん坊が喚き散らすのが一番いい的になるんだよ」とのことである。そうして赤ん坊はエイジュという名を与えられ生きることになった。立ち会うべき父親は産まれる前にどこかへ行ってしまった、母もエイジュを産んだその日のうちに家の前に椅子を出して座っていた。母が座っているその間、彼の面倒は祖母が見ていた。彼にとつての温もりは確かに産湯の中にもあるけれど祖母の温もりに依るところが大きい。そしてようやくこの世界に慣れ始めてきた眼が感じ取ったこの世の光は空に輝く太陽でも蠟を溶かす炎でもなく、近くの商店で一番安く売られている白熱灯だった。顔のほとんどに皺を刻んだ祖母の後ろから細長い棒の形をしたこの世の光がエイジュを照らしていた。光は美しいものでも醜いものでもなく、むしろ感動を拒むかのようにただそこに点いていた。虫たちは白熱灯に集って、エイジュの回りにも純白の血肉を狙った虫たちが徘徊していた。少しでも祖母が眼を離せば纏わり付く。気付いた祖母が手で払っても虫たちは執拗に纏わり付いていた。電球の表面には蛾が留まっついて、白熱灯の中にはどこから侵入したのかわからない小さな虫たちが蠢いていた。蛾の模様に見つめられているような気がして再び泣き叫んだ。産まれたばかりのエイジュは小さな虫に生命を脅かされるほど脆弱だった。祖母は

喚く赤子をその胸の中にすっぱりと収めて、かすれた声で唄い始めた。彼にとつての唄の経験、それはかすれた声の、不安定な音程の、淡々とした旋律。歌詞の中身はどこか遠い祖国を讃えるようなものだった。

僕は何度も子守唄を口ずさみ、朝日が眼に飛び込んできてようやく我に帰った。夜はもうどこかへ行ってしまった。朝は街を頭にする。僕が今いる街の朝は、みんな口を揃えて寂れているという割には車でどこもかしこもぎゅうぎゅうに詰まっっていて、誰も身動きが取れなくなっている。大通りも僕がいるような狭い路地も同じように。見上げると澱んだ雲が今にも崩れそうなほど不安定に積み重ねられて、「灰色のコンクリートの街並みと同化している。向こうから排気音に混ざって威勢の良い声が聞こえてくる。その声を発する集団は体格に不釣合な革の鞆を背負って、身体は制服に覆われている。そして僕の側を通るなり「独り言お化けだ」と言って一斉に指差す。鬱蒼とした雰囲気を打ち消すほどに明るく甲高い声で言い放つ。僕は意に介さないで身体を伸ばし、「おはよう」と答える。彼らと彼女らは「うわあ〜」と無邪気に叫んで走り去る。その先には自由を謳っている不自由な白い箱がそびえている。その中は十八の灰色の小箱に区切られていて、その小さな箱で朝から晩まで座ったりメモしたりするのが彼らの臨時的に提供された仕事である。期限は最低でも九年、例外あり。一応、望めば幾らでも大きな箱に移っていくことはできる。彼らのメリットは箱の住人と断っておけば様々な重圧から解放され、飛行機と長距離船が安くなることだ、あと寂れた映画館も。小さな箱には丁寧にも舞台まで用意されていてみんな自由と文

武両道の合唱をする。音程を外せば白い目で見られる。だからどんなに素晴らしい音感を持っていてもその中では歌詞カードに書かれたこと以外を唄うことは憚られる。僕がそこにいた頃の知り合いで絶対音感の天才的なピアノリストがいた。しかし彼は体調を崩してどこかに行ってしまった。小さな、しかも実のところ大した音響設備の整っていない箱の中では思いつきり演奏してしまふと音が乱反射して耳を壊してしまうのだろう。耳の悪い僕でもいつも首から上のどこかが痛かった。殆どの同級生たちはそのことに気付いていないか、気付いていても認めようとしなかった。あの頃、僕は一体何を唄っていたのだろうか。一番心地よかったのが祖母の子守唄だということとは昨晩唄った通り、今でも時折頭の片隅に流れている。僕がその悪魔的な無邪気さに覆われていた頃の唄。僕の手元には生まれた時の写真も、七五三の写真も、家族写真すら残っていない。手掛かりなしに思い出そうとすれば、それは結局都合よく書き換えられた妄信でしかなくなる。素直に唄の文句に従うことにしよう、歓楽の街と無邪気な合唱。

風化したコンクリートの手すりのない急な階段、その上にある家。そこには呼び鈴も、靴箱もない。土間と居間を薄い畳で仕切った板張りの敷。そこにはエイジュとその母、姉、血の繋がっていない姉、ヤモリ、がいた。最後までその家に残ったのはヤモリだけだった。母はいつも家の下で、照明に当てられながらパイプ椅子に座っていた。男物と女物を混ぜたあべこべな香水をつけて座っていた。週に何度も、その座っている母のもとに来る男たちがいた。ひどい時には一日に何度も来たことがあったが、突然パタリと来なくなることもあった。そしてある夏の暑い日、

母は着の身着のまま背広を着た男の後ろについて行ってしまった。サンダル履きだったが、そのまま帰ってこなかった。エイジュはまだ自分の年齢を両手で数えられた。すると今度は姉が下の階で座り始めた。姉は母親と同じように座ることを職業にしまった。途中から姉の友達も加わって二人並んで座り始めた。朝九時から座り始めて、夜中の十二時まで立ったり座ったりを繰り返していた。時には二人の前行列が出来て、二人はもぎりのようにテキパキと行列をさばいた。座り始めてからちようど三年目、姉は「今度、女優になれるの、スカウトが来たの」とはしゃいで近所の婦人服店で赤地に白い水玉のワンピースを買ってその日のうちに橙色の風呂敷片手にバスに乗ってどこかへ旅立った。エイジュはそんな中、朝六時に起きて当時は四十八に区切られていた漆喰のような灰色の箱に通っていた。その道はよく覚えている。当時の箱には門番がいて、ガキ大将と呼ばれる独裁者もいた。箱はその独裁者を頂点としたカーストに基づいて動いていた。エイジュはカーストの外側の周縁に位置していた。例えばそこには「肌の色」によってその位置に追いやられた者もいたし「肌の色」は殆ど変りなくても「産まれた場所」によって配置された者もいた。その不条理の犠牲になった者もいた。モリツグという少年がいた。母親はフィリピンからやって来て、父親は朝鮮からやって来たという。そして彼はこの島で生まれ育った。彼は別にそれとわかるような肌の色をしていたわけでも恐ろしく気立てが悪いわけでもなかった。しかし独裁者にとつてなにかしらの異分子としての要素が眼についたのだろう、その辺に関して独裁者は役所よりも細かで学者よりも目敏く発見し対処する。つまり、血筋が良くないと、まずは理由を拵えた。一体こんな荒野に血筋もナーベラーもないだろうとは思うけれど、彼はモリツグ

に私刑を加え続けた。田んぼで捕まえた蛙をそのまま煮えたぎる鍋に移してそれを飲ませたり、理由なく竹の棒で叩いたりもしていた。ある時こんな光景を見た。道沿いからは藪に囲まれた密室の草原で独裁者とその側近たちは輪を作っていた、その真中には一頭の山羊とモリツグがいた。山羊の眼は不気味に充血して、手足は小刻みに揺れていた。山羊の眼はモリツグを捉えていた。輪は少しずつ縮まり、それに従い山羊とモリツグの距離も縮まった。モリツグは彼らに言われるままに山羊の下に潜った、そして土汚れた黄土色の間から山羊を握った。一度は顔を背けたが独裁者が一喝し、上半身を起こして股間に顔を埋めた。山羊はモリツグの固く閉ざされた唇に触れ、口に含まれた。少年の口の中で山羊がふくれあがった。右手で山羊の細い足をきつく握り締めながら柔らかい弾力のある腹部を左手で殴り続けた。山羊が、呻く。モリツグの喉の奥の山羊に突き抜けるような力がこもった。野生の生命力が口の中で弾み、モリツグを貫いた。山羊の下から這い出たモリツグは嘔吐した。両手で限界まで口を広げて胃ごと出さんばかりに嗚咽した。輪は揺れながら歓声を出していた。おそらくこれが最も凄惨な場面だったはずだが、モリツグは一度も欠かすこともなく箱に通い続けた。一体なにが彼をそこまで掻き立てたのかはわからない。そしてその後独裁者はクーデターに遭うこともなく長期政権を維持し、任期を全うした。

すっかり陽は落ちて雲の隙間から時折夜空が覗いている。今日の大通りは静まり返っている。つい先日までは兵隊たちが肩を組んで歩いたりしていたのに、今日は派手な格好をした二人の女が肩を落として歩いているだけだ。伽藍とした大通りはネオンだけがうるさく瞬いている。その

道の果てには木よりも高いフェンスがそびえ立っている。フェンスの前には胸を張って背筋を伸ばした門番が一人立っているだけだ。彼は黙って眼の前の点滅する信号を見つめている。そんな彼も高校時代はバスケットの花形プレーヤーで、今は奨学金を得るために繁華街に面した門の前に物言わず立っているのだ。まだ門の前が賑やかだった頃、近くで唄う僕に一度だけ自分の願望を漏らしたことがある。曰く、もう一度コートに立ちたい、数学の教師になりたい、恋人を幸せにしたい、そしてメキシコに帰ってしまった母に車を買ってやりたい、という四点についてだった。僕はこの孝行者で雨の日も風の日も立ち続ける殊勝な門番をいたく気に入っている。今晚も僕が拙いスパングリッシュで「そろそろ君の故郷は乾季に入るだろうけれど母親には連絡したかい？」と言うと少しだけにはかむのだ。今日は僕ら二人つきりなので、今度は母たちについて唄ってみることにしよう。

エイジュの母、ナオミがいつ産まれたかと言えば、それはこの島がかつてないほど人とその死体で溢れたあの季節に例の産婆の手によって産まれた。その血は彼女の母シンコーナオミの母であり、エイジュの祖母であるーが帝国陸軍中尉にほんの束の間だけ心を許してしまったことに起因する。産まれる一年半前から島が人で溢れ、住人がいくら逃げ出しても別のところから色んな人々が入ってくるのだった。まさしく人種のるつぽと言っても差し支えないほどだった。るつぽの中は赤黒く染まり、やがて季節が変わる頃には海に流れていった。シンコの夫ーつまりナオミにもエイジュにとつてもどう定義していいのかわからない男ーは七つの島を点々とした成果とし

て両足を海に捧げて祖母のところへ帰ってきた。失意によって動けなくなった自分のパートナーのためにシンコは頭に布巾を巻き、国のために炊事洗濯から看護にまで昼夜問わず動きまわった。そして少しずつ人が増え始めた暑い夏の日、精悍な顔つきの中尉がシンコの前に現れた。見初めあつた二人は、シンコが中尉のもとに食事を届けに行ったその晩のうちに全てをせっかちに終えてしまった。配膳は一ヶ月ほど続いた。それからシンコは献身的に、かつ後ろめたさを抱えながらパートナーに尽くした。もしかしたら尽くすためにナオミを産んだのかもしれない。幸か不幸か二人に一人がその犠牲になつたあの数カ月をこの三人家族は運良く生き延びた。中尉のその後は中尉本人も含めて誰も知らない。せっかく生き延びたシンコの夫も翌年には死んでしまった。

この話はシンコが孫に枕元で聞かせた話だから見栄や誇張を含んでいるかもしれないし嘘八百かもしれないが、彼女が死んだときにその遺品に錆び付いた陸軍のバッヂがあつたのは確かなことらしい。シンコとナオミはその後、闇市で塩と焦土の中から発掘された鉄製の品を売り捌き、飛行機が落ちようと大きな行進が起きようと変わらず同じ場所で同じものを売り続けた。年頃になつたナオミはその精悍な顔付きを受け継いだ美しい女へと成長していった。ちょうど再び別の場所で戦火が燻り始めていたためナオミはシンコに言われるまでもなく、エイジユが生まれ育つたあの場所に椅子を持って行って腰を掛けた。ここからナオミの長い長い人生が始まる。何より夜が長かつた。「ベッドは直ぐに壊れてしまうから」と、横着なシンコがゴザに直接布団を敷いたりしたものだからナオミは若いうちに腰を痛めてしまった。昼間は黒人たちのために背広や晴れ着を仕立てて夜もそのまま彼らを覆つた。五年経つたある日、ちょうどナオミが二十三になる春だつ

た。島の外からやってきた背広の髭の男がナオミを虜にした。彼はナオミが今まで会ったどの男よりも優しく接してくれたし、なにより思いの丈を率直に伝えることができた。しかし彼は仕事の関係で呆気なく海を渡ってしまい、ナオミは待ち焦がれながら座り続けることになった。エイジユの父は背広の髭の男だろうか、あるいは別口だろうか。ナオミは異なる三人の男に支えられながら、心から愛した一人の男を待ち続けた。実際エイジユの父親が誰だろうと関係ない。もしかしたら当該の男以外の可能性も充分高いのだし。

それにしても女はいつも待たされるものなのだろうか。

門番は眼に涙を貯めこんで、しかしいつものように黙って点滅する信号を見つめている。そして鼻を吸る。僕は沈黙のチカーノに一礼して、長い長い坂を下った。途中、木々に埋もれた墓場や干上がった川、めくられたアスファルトによって顕になった人骨なんかを僕を迎えた。そして仄かな有機溶剤の匂いがした。このまま歩くと、昔住んでいた家に着くはずだ。母の唄には続きがあるのだが、若い彼にはまだ早いと思って唄わなかった。人骨とコウモリに向かつてなら、心置きなく唄える。

ナオミはこの島では滅多に手に入らない東欧の香水を貰っては付け、米国南部の情熱が詰まった香水を貰っても律儀に同じ量だけ付けた。おかげであべこべな匂いを発していた。東欧の香水をくれたのは黒人街へ一人で潜入するスリルを楽しむイタリア男だった。もう一つの香水は恰幅

の良い静かな黒人の男だった、名前はビル。エイジュの姉の肌の色はビル譲りのものである。そしてもう一人は季節工で秋に内地へ潜り、次の夏の手前に帰ってくる、おしゃべりな島の男だった。しかし内地に行つて戻ってくるその期間は徐々に長くなり、最終的に帰つてこなくなつた。ある夏の暑い日―重大なことが起こる日は決まつて暑い―ナオミがいつものようにビルを部屋に迎えたとき、扉の影には背広の髭の男がいた。

エイジュは夏休みだった。部屋の中、一人で寝転んで漫画を読んでいた。漫画の内容はわからない。一階の扉が激しく閉まる音がした。そしてなにかが割れる音も。普段は別に下に誰が来ようとなにが起きようと興味は湧かないが、このときはなぜか下に降りた。漫画が詰まらなかつたせいかもしれない。忍び足で階段を降り、いつもナオミが使っている部屋の扉に身を寄せた。恐る恐る隙間を覗いた。真っ赤な灯りの部屋には背広を着た髭の男がいた。そのときは単なる髭の男でしかなかつた。蛙のような出つ張つた腹部をもつた浅黒い髭の男だった。男はナオミを横に侍らせていた。侍らせる、というには互いの腕も足も巧妙に入り組んでいた。エイジュは立ち尽くした。二人の足元には照明を反射して所々白光りする赤い湖があつて、その中に裸のビルが寝そべつていた。エイジュは思わず扉を開けた。ナオミと髭の男は驚く素振りを見せず、それぞれろかはあつちへ行けとも、こつちへ来いとも言わなかつた。髭の男は少しか口元を緩めながら手では母のヘソを突付いていた。母は怯えた眼でエイジュを見ていた。果たしてエイジュを見ていたのかその後ろにある柱時計を見ていたのかその焦点はわからなかつたが、体は震えていた。男は単にさすつていたのではなく慰めていたのかもしれない。エイジュは男と母を一度ずつ見つ

めて、会釈してその場を去った。エイジュは二階のベランダから落ちそうになるほどに身を乗り出して、ただひたすら遠くを見つめようとした。どこまでも灰色のコンクリートが広がるばかりで、一向に海は見えない。下の道路に男が再び背広を着て現れた。背広を着ると醜く膨れた腹部も自然と隠れる。一度振り向いて、エイジュの眼を見て、笑った。再び踵を返して歩いていった。男がエンピツぐらいの大きさになるまで歩いて行った頃、ナオミが着崩れたまま駆け出てきた、赤い下着の紐が見えて裸足のまま、サンダルを手を持って。母たちがマツチになるまで見守って、一階に駆け下りた。その部屋には、まだ人の気配も温度もあった。しかしビルはもういかなかった。エイジュにとつて父親など法律は元より観念的にも倫理的にも全く不要のものだった。しかしなぜだか母はその存在が揺ぎなく、今でもそしてこれからも全ての思い出の中に居座り続けるのだろうか。

僕は時々かつて住んでいた家を目指す。もちろん僕はその帰り道について、よく知っている。むかしむかし、毎朝毎晩通ったから。しかし、僕がその家を目指そうとするといつも決まって月も星も出ない。そういう夜は経験に裏打ちされた勘に頼るほかないのだ。手探りで一歩ずつ進む。途中で思わぬところに段差やほとんど落とし穴と言つていい凹凸があったりする。かつてこの道を歩いていたときは、隣に女の子がいて、よく二輪が転倒していたのを二人で見たりした。僕たちはその場に居合わせたときは深刻な顔をして運転手に甲斐甲斐しく接するのだが、一つ角を曲がり運転手が見えなくなれば顔を見合せて笑った。梅雨の時期はよく笑った。そしていつの間

にか僕はこの道を一人で歩くようになった。あの女の子がどこに行ってしまったのか、残念なことに思い出せない。そして名前も思い出せないのだが髪の高い快活な大きな瞳と黒い肌をもった子ということだけ辛うじて覚えていた。しばらく歩くと饅えたような、何日も体を洗っていない犬のような臭いが暗闇に立ち込める。それは懐かしい臭いにも思える。そして数字が頭に浮かぶ、2―34、二丁目三十四番地。黄色に黒字の看板が眼に入る、カフエーダルマ。その隣にはスナックポヤージュ。看板の電灯は点滅する。昔、僕は真昼にその店内を見た。快すぎるほどに晴れた日、全開になったペンキの剥がれた木の扉の影に、犬がいた。大量の酒瓶が置かれたカウンターの足元に大きな白い犬。白と言っても滅多に水を浴びないから、所々白で殆どは灰色なのだ。このしけた酒場の臭いは彼の発するものなのだろうか。酒場の明かりも消え、さらに道は光を失う。だいぶ眼も慣れたはずなのだが依然として、ぼやけた濃藍しか見えない。あてもなくこの道を歩き続けた。「昔、ここから水が湧いていました」というような看板が古い言葉で書かれている、もう近くだ。緩やかで長い下り坂になる。勘をより一層澄まさなければならぬほど、闇が迫る。鬱蒼とした木々が石塀を覆う。予想だとそろそろ着く。キノコを模る木の影の中に、一つだけパイヤの木が見える、濃い緑の玉が宙に浮く。下り坂がやがて平坦になる。そこには家も、その跡すらない。やはり今日も辿りつかなかった。こういうときはなにを唄おうか。

ナオミのいなくなった日、エイジュは夕暮れまでずっと黙り込んでいた、まるで彼の周りだけ言葉どころか音すらなくなった世界のようなだった。夕方、姉のヨーコが帰って来た。ヨーコは何

事もないように夕食の準備をして、エイジユもいつも通りに振舞った。昼のことを話すか迷った。食卓に茶色の皿が並ぶ。

「母さん遅いね」とエイジユは呟いた。

「父さんはもつと遅いから大丈夫よ」

ヨーコはエイジユではなく箸で摘んだ豆腐に向かって応えた。

「戻って来なかつたらどうする」

「どうってなにが」

「いやいなくなつたら困るしさ」

「まあ、困りもするけどなんとかなるんじゃない。それよりも食べないんだつたら豆腐ちようだい」

ヨーコはエイジユの小皿から取り上げてそのまま口に運んだ。

「いつかは出て行くものだと思つてたしね」

血色の良い唇の間で、豆腐が潰されていく。

彼らの母が消えた一週間後、姉の友達が来た。背の高いヨーコに比べてずんぐりとした、愛嬌のあるそばかす顔の女。

「今日からうちに住むから」

「サチです」

サチは引越して来た割には荷物が少なかった。サチはナオミのお下がりばかり着ていたが袖

丈が合っていないかった。それでもすぐに違和感や嫌悪感もなくなり、すぐにサチの服に見えるようになった。

ヨーコとサチは学校に行かなくなった。代わりに一日中家の前に座り、空いた時間に内職をして生計を立てた。エイジュの部屋から障子一枚隔てた向こうで、二人は何かを織ったり切ったりしていた。その部屋には微かな有機溶剤の臭いが漂っていた。二人は喧嘩もせず、そして口も聞かずにひたすら作業をしていた。エイジュとはほとんど食事のとき以外顔を合わせる機会がなかった。二人は傍から見ていると、身長以外も対照的だった。サチはどちらかという日陰を好んだ、ヨーコは陽に当たっていないなければならない性分だった。そんなヨーコが女優のスカウトにはしゃいで出て行くのは当然のことだった。サチは昔から人見知りで、身内と人形だけに気を遣わずに生きてきた。

夕立はあがったばかりで、街に漂う蒸気はヘドロの臭いを含んでいた。その夕暮れの光景は鮮烈な橙色よりも、腐敗途中の生物が最後の存在を証したかのような臭いが強く鼻を突いた。その中に、まだ値札の付いたワンピースを着たヨーコが立っていた。

「じゃあちよつと行ってくるから」

この家から出て行くときにきちんと別れの挨拶をしたのはヨーコが初めてだった。目一杯着飾ったヨーコはバスに乗って夕暮れの向こうに消えていった。

いつもの家に戻ると、そこにはカメラをぶら下げた男がいた。僕のもとにやって来るのはなに

も再選を目指す議員だけではない。彼はいつもカメラを持ち歩いて、僕をそのレンズに収めようとする。彼によって僕の一挙手一投足は何百枚という印画紙に焼き付けられることになったし、最近僕のため息までも録音しようとしている。初めは面倒に思えたが今ではもう慣れてしまった。僕が彼のレンズの前で話すことは全部出鱈目だ。僕は王族の末裔で今の収入源は王朝時代の遺品を質に入れていゝる、またあるときは土地代が湯水の如く湧いてくるとも言った。いずれにしても僕は嘘が下手だ。しかし彼は嫌な顔一つせず、いちいちうなずくのだ。もしかしたら、彼の狙いは虚実ない混ぜにした「僕」の日常を全て写し撮ることなのかもしれない。僕にとって一番厄介な手合いかもしれないし一番必要な理解者なのかもしれない。少なくとも週に一度やって来る律儀な彼に、今日は僕の輝ける日々を唄ってあげよう。

まるで何事もなかったようにエイジュとサチ、二人の生活が始まった。

「ヨーコ行きよったね」

「うん」

「けど別にいいやんに」

「うん、サチもいるし」

「そうよ、私ももう家に戻れんし、よろしくね」

その日の晩ご飯の支度はエイジュがした。

少し変わったことといえば、エイジュも内職を手伝うようになったことだけ。サチとの生活は

平凡で平穩だった。サチは自分たちの生活のために朝から晩までパイプ椅子に座っていた。

「若い女だったら誰でも出来るのよ」とサチ。

「違ふと思うよ」とエイジュ。

それ以上はお互いうまく説明できなかった。

もともとサチはエイジュを気に入っていた。弟のように可愛がっていたし、やがて年下の男として可愛がった。サチの提案により、週に三回、居間のソファアを共に寢床にした。それ以外の日は、各々萎びたイグサの上に寝ていた、障子一枚挟んで。エイジュの部屋には仏壇、サチの部屋には台所があった。

ある晩、それは週に三回あるその日だったが、エイジュは薄目を開けながら寝ていた。サチが台所で洗ひ物を済ませてから、母が昔着ていた寢間着でやって来た。エイジュは若かったせいもあり、裸で毛の生えた彼女を期待していたので、初めがっかりしたがその着物が思いのほか心地良かったので次第に満足していった。二人はそのまま何事も無く寝入ってしまった。

また、逆にサチが先に寝入ってしまったとき、エイジュはその顔を近くでまじまじと、顔に穴が開くほど見た。そばかすはあったけれどそれゆえサチはよく顔を洗っていつも清潔だったし、鼻の上のところで続けている力強く濃い眉毛の下の、長いまつ毛の密生したいささか突き出た灰色の目元は、安らぎを与えた。はつきりそれと分かる頬骨、その頬骨は落ち着いた平板な印象を顔に与えた。それを辛うじて救っていたのは小さなしかし美しくないこともない、愛嬌のある、むしろ可愛らしさを際立てる点ではよく出来ている鼻。サチの額は丸く纏まって短く、毛の生え

た鼻根の上にはなにか考え事をする縦皺が寄るのだ。さっと血の通う健康な耳の後ろにはお下げをぶら下げていた。

そのお下げを解くとき、それは徐々に体の内から解けていくときだった。解けた後、再び絡まる。二人は週に三回はそうやって寝入った。

カメラをぶら下げた男は満足そうに帰り、僕は一人になった。軽く横たわって、ゆっくりと空を見る。

草木が呼吸する音、虫の羽音、小川のさえずる音、誰かが忍ぶ気配、遠い笑い声、そして広大な静寂、全てが僕より優れた唄い手たちだ。無数の唄がひしめき合って僕はその中に埋れてしまふ、この筋道の石垣にだらりともたれ掛かり、息が詰まり、涙が溢れ、充滿する唄の中で、僕の喉を誰かの声を通る。その瞬間が僕にとつての得も言えぬ快感の時だ。この世は歓喜に包まれ、僕は追憶と音律の快樂の渦の中で失神しそうになる。だから唄っている間は朦朧としていたものだ。過去の侮蔑も怒りも歎びも全て唄の中のことでしかない。じゃあ僕にとつての今、現在は一体なんなのだ？ 挽歌は未来のことについて唄えない。過ぎ去ったことしか唄えない。困ったものだ。かつての別れの瞬間を唄うことは出来ても、いずれ来る永遠の別れや新たな出会いを今のうちから唄うことは叶わないのだ。それと、僕自身のことについても唄えはしないのかもしれない。僕は僕自身を唄ぶことができないから。だから僕のことについてはどうか聴衆の皆さんが自由に思いを巡らせてください。それでは僕のレパトリーも残すところ僅か、今日の木枯らしが温風

に感じるほど寒い冬景色を唄いましょう。

港は静まり返っていた。エイジュは待合室にある白いベンチに座っていた。隣にはサチが座っていた。港に到着したときはまだ陽があった。深い夜の海は疎らに貨物船が停泊するだけだった。ここが島で二番目に大きい船着場だった。埠頭にはコンテナが延々と並べてあった。鉄の戸は閉められ、まるで地面から生えてきたかのようにずっしりと横たわっていた。島は冬だった。指先が少しずつ冷えてゆく。エイジュが手を擦り合わせていると、サチが手をとった。サチはエイジュより少し温かかった。汽笛が鳴った。今度はエイジュが去る番だった。内地に渡りそこから漁船に乗る。何年も海の上で暮らす。

「帰って来たら、そばでも食べよう」

エイジュが言った。

「浜辺にあるそば屋がいいわ」

細い声でサチが応えた。

「そのとき、まだあるといいな」

「そうね」

船着場の中に十名足らずの人が入って来た。誰もが一人で、無口だった。エイジュとサチは海鳴りだけを聴いて満足出来るほど生きることに疲れてはいなかった。あと少しでエイジュはサチとも、この街とも、この島とも別れることになるのだ。去る者は残る者より感情に乏しいものだ。

十分哀しいのだが、残された者はさらに晦渋や恨めしさが残る。それに比べれば何とも呆気ない。サチは明るく振舞っていた。体を壊さぬようエイジュを気遣った。

「落ち着いたら、手紙出すから」

「いいわ、手紙なんて来たら、変にしんみりしちゃうし」

「そっか」

「あたし、いつも見送ってばかりね」

「うん」

待合室に一縷の風が流れ込んだ。

「待って、本当に行くの？」

「花に嵐の例えもあるさ」

「花は散っても実がなるから、まだいいわ」

「ああ、まあね」

少し黙った後、二人は芝居じみた会話の間に思わず吹き出した。前日、国道沿いの小さな映画館で観たワンシーンを自分たちに当てはめていた。カメラが彼らを捉えているならこの後、エイジュはサチを抱きしめ沈黙よりも長い口づけを交わすことになっているのだが、彼らは互いの額を見つめることしかできなかった。出航のアナウンスが響く。そうこうしている内に、エイジュはもう船に登っていた。なにも考えずに湾岸に向かって手を振った。豆粒の大きさになるまでお互い振り続けた。

今、島にいる。ずっといるのだがどれくらいいるのかわからない、時計も日めくりも持ち合わせていないから。そしてどう足掻いても人に聞いてもかつて住んでいた家には辿り着けない。

ある日、僕と眼の合った背の高い瘦せた男―肌の色は血を失ったように白く、頭髪らしきものも一切なかったから首から上が大福のようだった―が僕に歩み寄ってきた。

「サチか」

静かにそして声を大きく震わせながら男は呟いた。

「さあ、よくわかりませんが」

たまに僕の名前や素性を尋ねる人がいるのだけれど、僕は曖昧な記憶の欠片すら持ち合わせていないので特になにも答えられないことがないのだ。そしてほとんどの人は諦めて僕の元を去って行くのだが、彼は眼を泳がせながら語り続けた。

「ようやく、戻ってきたんだ。もう俺は俺」

男は黙り込んだ。

「サチ、よく生きとった」

いきなり顔を上げて言うとは度は咽び泣き、僕の手を固く握りしめるのだ。

「お前のことをずっと考えとった。一緒に暮らそう」

僕もさすがにこれには困った。今の家はどんな場所よりも住み心地がいいし、何より僕はここから唄い手になる予定なのだ。

「すみません、人違いじゃありませんか」

「いや、違うサチ。離島出身の祖母がいて、母親は戦時中に生まれて十歳の時どこかに行っちゃった、いや実は今は北部の病院にいるんだがな。そして姉は映画のスカウトなんて体の良い話に乗った拳句、悪い男に騙されて内地の温泉街に売り飛ばされた。そしてエイジユつまりこの俺、奥間栄順は二十年近く作業船やらトンネル掘りを経て、たった今、帰って来た」

「あらそうですか、色々とよくご存知で」

「そりゃそうだ、俺のことは全部俺がサチに話したことだからな」

僕は一言だけ応える。

「お帰りなさい」

いつの日だったかオレンジ色のパーカーを着たソーシャルワーカーが僕を「保護」するように持ち掛けてきたことがある、あるいは黒ずくめの調教師風の男が僕を「教育」するように持ち掛けたことも。北部にある静かな施設に「入院」しませんかとか、離島にある古びた館で「飼育」されませんかというようなことも言われた。

僕の答えは「待っている人がいますので」

サチはその後、多くの男たちと出会うことになったのだが、多少付き合うことはあっても、誰も「愛する」ことはなかった。愛する人はただ一人、というのは方便のようでもあるけれど、待ち続ける理由としては充分過ぎた。パイプ椅子はやがて肘あて付きの革張りになり、座る時間も

少しづつ減っていった。十年経った頃だろうか、サチは座るのを止め、立っていた。雨の日も風の日も、来るはずもない誰かを待ち続けるように立っていた。

さて、待ち人の方はどうなったか。彼の行方は誰も知らないのである。船は確かに一度大きな港に着いたらしく、絵葉書にはレンガ造りの建物が立ち並んで、後ろには水兵さんたちが笑っていた。

しかし残された方は、寂しかった。情感も残ってなければ、曖昧な記憶すらないのだ。寂しくて仕様がなかったのでどこかで聞いたことのある子守唄を口ずさんでみた。多少寂しさは紛れるし、道行く人々が僅かばかりの小銭を投げたりもした。今度はもつと長い唄を唄い始めた。長いと言っても人生の中でほんの数年見聞きしたことを元にした唄だ。最も寂しさを紛らわす方法、それは思ひ出の中に生き、過去と同化してしまうことだ。

彼は再び、突然現れた、そしていきなり僕に結婚を申し込むのだ。僕はぎよつとして近くにあった物をすぐにまとめるなり一目散に逃げた。その後も彼は足しげくやってきた。花だったり食べ物だったり、まるで僕を仏壇か何かと勘違いしているんじゃないかと思うほど風呂敷一杯に持ってやってくるのだ。再び逃げ出そうとした僕に向かって彼は叫ぶ。

「サチ、一体なにがダメだって言うんだ、ええ？お互い落ち着いて、一回きちんと話し合おう」
何度僕を口説きに來ただろうか、終いには「俺と結婚したらここに住めるから」と屋根付きの一軒家にまで僕を案内した。すると家の中から千鳥足の女が出てきた。

「サチ、あんた元気にしてたかい。元気かい？私はこの通り元気だよ。だからちよつと買つてきてくれないかい」

一体なが良いって言うんだ。話し合つたところで解決するようなことでもないじゃないか。あまりに馬鹿馬鹿しくて僕は思わず吹き出してしまった。彼と酔つ払いの女はたちまち赤くなつた。

「一体なにおかしっていうんだ」

二人とも声を揃えて、顔をしかめた。僕は口元を緩める。

「うん。じゃあ、いいよ」

僕らの結婚を祝つたあの日から早速男は僕のことを名前でなく「おい」とか「お前」とかいふ風呼び始めた。彼の母親はその真つ白な頭を梳かしもせず、病室から着の身着のまま出てきた感じで、結局その日は一言も発さなかつた。姉の夫という男は明らかに堅気とは思えないナリで、ヨレヨレのご祝儀を合成皮の剥がれきつたセカンドバッグからぞんざいに渡してそそくさと去つた。一方、姉の方は方で朝から飲み続けて、正午には酩酊していた。

僕は半日と三時間であの家から出てきた。僕が出て行つた後も三日三晩祝賀は続いたそうだなんで目出度いのだろうか。

僕を狂つていふと言う者もいれば、それ以上に憐れな路上生活者だと見下す者もいる。誰が何と言おうと唯一自身で確信していることは、僕も単なる哀れな人間だということだ。だから、哀れな人間がその哀れさを耐え凌ぐには唄の一つも口ずさまなければ、本当に狂つてしまひそうに

なる。そして僕が捧げる唄は全て僕の中のエイジユ、ナオミ、シンコ、ヨーコ、サチのためのものだ。思い出は歓びに充ち溢れて、清々しいのだ。

菅谷 聡（すがや・そう）／教育学部・島嶼文化教育コース四年次

選 評

びぶりお文学賞は今回が第四回目である。今回も含めてこれまでの全体的な印象を言うならば、応募作品数は減少しているが、そのかわりにシリアスで意欲的な作品が増え、作品の水準も高くなってきているということになるだろう。

例えば「青年BBS」は、現代的な題材に加えて複雑な心理描写を試みていて、きわめて意欲的である。あるいは、「歓喜の挽歌」のように、複雑で実験的な語りの手法に挑戦するなど、大学レベルの文学賞として強い印象を与える作品もある。また、「腕と少年」のように、二重の視点で短編の語りを創造しようとする作品もある。単なるファンタジーを越えて、新しい文学を創造しようとする意気込みに敬意を表したい。

ただ、率直に言えば、それではこのような実験や挑戦が成功しているか、読者を惹きつける作品となつて結実しているかと問われたら、それはまた別の話になる。例えば、「青年BBS」は「ネット掲示板風の、チヨークで書き込む畳二面ほどのアナログ掲示板」を意味するが、それに書き込まれた自殺予告を巡つて物語が展開する。「新管理人」の錦城光とその友人の又芳長潤は、自殺予告を書き込む人物を見張りながら突き止めようとする。アルバイト先であるファースト・フード店の描写などを挿入しながら展開される語りはスリルがある。話を端折つて言えば、じつは書き込みをしていたのは光自身であり、光の二重人格性が結末で明かされる。文体も安定していて好感が持てるが、この作品の難点は、せっかくの題材と語りがしっかりとした伏線にサポートされていないために、結末の意外性が説得力に欠けるということであろう。この作者は、過不足なく情報を読者に提供しながら物語を語っていく方法が磨く必要があるだろう。

「腕と少年」は、交通事故で死亡した女性の片腕を現場から持ち去り、それを隠し持っている竹下希望と、それを目撃する山口雄大の二人の視点から物語が語られる。怪奇的で（率直に言えば）グロテスクな描写が

続き、読者にはけっこう辛い読書体験になる。小説の語りの方で言えば、ダブルの視点のおもしろさは十分に味わうことができるが、ただ、このような描写は、作品が作者の自己満足に終わっていないかということが問われることにもなるだろう。どのようなディテールが読者に文学の喜びをもたらすのか、あるいは、どのようなディテールが逆の効果を生み出すのか、この作者はいろいろな作品を読みながら検討してみることがあるだろう。

「歓喜の挽歌」の書き手も語りの実験に挑戦している。作品の冒頭では語り手が誰なのかはつきりしない。モダニスト文学を思わせるような、断片化され、(論理的な繋がりをあえて説明しない)ディテールを併置する語りが続く。ここで読者がしばらく辛抱していると、やがて「僕」という語り手が登場し、日常的な会話が展開され、「普通の」語りが展開されるようになる。文体は緊密、ときには詩的な散文が挿入され、この書き手の才能を感じさせるものになっている。しかし、ここでも問題は、ディテールが過不足なく書き込まれ、伏線が後半で生きるように書かれているかということであろう。率直に言えば、この作品を読みながら、なんども伏線さがしをせざるを得なかった。書き手は細部を整理し、構成を再検討する必要があるだろう。複雑な構成は必ずしも理解不可能ではない。問題は、どこまで書いたら読者に物語がうまく理解されるか、どこまでディテールの情報を伝えたら読者が作品を楽しむことができるかということであろう。可能性を有する書き手であり、再度の挑戦に期待したい。

「爪探し」は特別に変わった語りの手法が採用されているわけではない。淡々とした語りと、丁寧にディテールを重ねていく構成で読ませる作品になっている。関東生まれの語り手は、大学で三線に取り組むものの、難しさを感じて水牛の角で作られた「爪」をちり箱に捨てる。しかし、沖繩生まれで祖父から三線を学んだ恋人のヒカルの歌と演奏に感動して、結末でちり箱の底から汚れた「爪」を探し出す。三線の「爪」はヒカルに対する愛情の象徴であり、文化や歴史を深く理解した語り手の覚醒を象徴するものでもあるだろう。

全体として、安定したゆるやかな語りと、人物描写や会話に躍動感があって、小説の基本をきちんと押さえて書かれた作品である。ただ、ここというところで描写が軽く流れてしまうと気がなった。例えば、ヒカルの祖父と、その祖父やその父親との関係や、「ヒヤミカチ節」に出てくる「パシフィック」という言葉について、せっかく読者の気を惹きながら、説明をしないでそのままにしたのはもったいないというか、怠慢というべきか。読者は宙ぶらりんのままである。どちらも沖繩の戦争や移民という重いテーマと結びついたものであるから、小説のディテールとしてきちんと書き込むことで作品はさらなる深みを獲得することができたであろう。しかし、作品はびぶりお文学賞の受賞作品としてのレベルに十分に到達している。久しぶりの受賞作品の誕生を喜ぶたい。

「冬瓜」がユニークなのは、作品でふんだんに使われている沖繩語の表現である。大学生の一樹と同居する祖父の会話はほぼ沖繩語で書かれていて、しかも読者が理解しやすいような工夫がされている。全体として瑞々しい描写が印象に残った。ただ、人物描写がステレオタイプに傾斜しがちで、ここは工夫が欲しい。例えば祖父が、主人公が通う国立大学が、日本中から学生が集まるということだけでそれに対してあまり好感をもっていないこと、それは戦争中の日本兵の蛮行の記憶がトラウマになっているからだという説明は単純すぎる。また、これはすでに多くの沖繩の小説で描かれてきているものでもある。このような既視感を越えて素材を斬新に描くところから新しい文学はうまれてくると思う。さらに言えば、障害をもつ女の子がなぜ「冬瓜」にこだわるのか、そしてなぜタイトルが「冬瓜」になっているかという、この作品の核心的な部分の説明されていない。少女と主人公のウチナーヤマトグチの会話は詩的で美しい。このような言語表現が可能だということを示したことを高く評価したい。だからこそ、なおさら「冬瓜」の意味、その象徴性の描写が欠落していることが惜しまれるのである。

「I Pray ……」や「ルル」は、ファンタジーの要素が強すぎ、作品としては荒削りである。作者は蓋然

性を有するディテールを多用し、読者が納得するような語りを学ぶ必要があるだろう。

新しい文学の誕生を期待して創設されたびぶりお文学賞であるから、応募する作品に実験的な作品が多いのは歓迎すべきことである。しかし、実験だけでは作品は成立しない。そのような実験が成功するように、書き手は何度も作品を書き直し、みずからの作品の実験性が創造的な価値を有するものだとすることを読者に納得させることが必要だ。難しく書けば評価されるということにはならない。複雑な構成、入り組んだ語りの方法を選択するのであれば、逆にそれゆえに読者が楽しみながら作品を理解できるような工夫が必要だ。既視感から解放された新たな作品の誕生を期待したい。そのためには多くの作品を読み、そこからなにかを学ぶ必要があるだろう。

(法文学部教授)

「第四回びぶりお文学賞」選評

喜納育江

今年も個性的で読み応えがある作品七編が最終選考に残った。びぶりお文学賞受賞作は「爪探し」だったが、これが過去に二度佳作を受賞していた作者の作品であると審査後に知って、正直のところ驚いた。「爪探し」は、この作者の過去の佳作受賞作の二作とはだいぶ異なる作風に思えたからだ。過去の二作は、どちらかというときと空間・時間ともに「どこか遠くの物語」であり、私自身は、そうした「遠さ」を細密に再現できるこの書き手の想像力と表現力に非凡さを感じていただけに、今回の作品のような、どこにでもいそうな大学生の男女二人のありふれた会話と生活空間から紡ぎ出される物語は、とても同じ人が書いたとは思えな

いほど平凡に思えたのである。

だが、考え直してみると、この作者が三度目の投稿でこの着地点を選んだという事実は意義深くも思える。つまり、卑近で平凡な日常の断片ひとつひとつを丁寧去感受し言語化することによってのみ、その言葉には中身が伴うということが示されているようにも思うからである。壮大で深いテーマを巧い言葉で表現し得たとしても、「巧さ」が「中身」に直結するとは限らない。日常の時間と空間から生じる言葉は、書き手の想像力を通して実感される。つまり、咀嚼された意味が身体化されて「中身」を伴った言葉となる。「ヒカル」という恋人が体現する日常の背後には「文化」という大きな物語があり、恋人という卑近な他者と「沖繩」という生活の場を通して「文化とは」、「自分とは」という理解に至るといふこの物語は、等身大の感覚をベースにしつつ、大きな物語を表現し得たという点で文学的な質の高さを備えていると言える。

佳作の「青年BBS」、「歓喜の挽歌」、「冬瓜」も、物語作りの完成度において受賞作には及ばなかったとはいえ、それぞれが個性的な力作だった。私は特に「冬瓜」に興味を引かれた。ウチナーグチでの表現には、確かにやや不自然で違和感の残る箇所もあり、この作者にとってウチナーグチがどの程度身体化された言語かどうかは明確ではないが、作者なりにウチナーグチと日本語の狭間の言語空間を模索している様子が伺えた。また風景描写に表れる詩的言語感覚にも好感が持てた。

「青年BBS」と「歓喜の挽歌」は、ジェンダーの概念を利用して読者の先入観を攪乱し、物語を意外な結末へ導いていくという点で共通しており、それはそれでおもしろい着想だったのだが、それを余すところなく読者に伝えているかどうかという表現の粘り強さや用意周到さという技巧的な点で、まだ改善の余地があったように思われる。

また、今回は受賞作以外の作品も良かった。「I pray . . .」は、「神様試験」を受けるべく世界中から集った普通の人々が「神」という壮大な存在を自分なりに探求するという着想が独創的でおもしろかった。スピー

ド感をもった会話も楽しかったが、物語の核心にある「自分を恐れないで」という言葉の意味が深められていないのに加え、人物たちの経験の描き方が浅い感が否めなかった。異文化の背景をもつ人物の声を十分に描けるよう、勉強と工夫が必要かもしれない。

「ルル」は、不思議な老占い師と小学生の男の子と女の子の交流をファンタジックな設定で描いた個性的な作品だった。おそらく小学生とルルの存在を通して、学校や介護施設といった社会の制度からの自由をテーマにしたかったのではないかと推察するが、それと登場人物たちの「恋」の物語がどう絡んでくるのかを整理し、もっと読者を引きつける展開にしてみらえればなお良かったと思う。

今回、七編の作品の中で最も評価が分かれたのは「腕と少年」だろう。事故の現場に出くわしたことで、たまたま女性の腕を拾ってしまった青年と、暗い彼とは対称的に明るい青年の声で物語は進んでいく。後者と生身の恋人との関係に比べ、拾った腕に恋人のように話しかける前者の姿にはグロテスクなフェティシズムさえ感じるが、決して全体像をなしえない「部分」だけの恋人の身体を愛おしく扱う若者の姿を病的と取るか、人間の主体と身体の乖離性の表現と取るかで選考委員の好みが分かれた。とはいえ、この作品が受賞に至らなかったのは単に好みの問題ではなく、全体的な物語の描写に丹念さが欠けていることが指摘されたからであることは明記しておきたい。

全体として、今回は言葉の「中身」について考えさせられた。小説はフィクションである。しかし、フィクションはフェイク (fake) と同義語ではない。リアルに見せようとしてフェイクに陥るフィクションもある一方で、フィクションであると言いつつどこかリアルなメッセージを伝え得るフィクションもある。意味が咀嚼された「中身」を伴った言葉で物語れるかどうか。言葉や身体「中身」が軽んじられがちな時代の文学には、そんな問いが投げかけられているようにも思われる。

(法文学部准教授)

第四回びぶりお文学賞 選評——新鮮な発想に大きな可能性

大城貞俊

文学は、虚構であるが故に多様な物語を紡ぐことが出来る。過去の体験を基底に想像力を膨らませることも出来るが、未来をバーチャルに想像する楽しみも捨てがたい。創り上げた世界に、自らのメッセージを忍び込ませたり、対極にある他者を演じたりすることは、心躍らせる至福な時間でもある。文学を愛好する者の特権と言ってもいい。

「びぶりお文学賞」には、創設当初から高い期待を寄せていた。今回、縁あつて審査会に加わらせて貰つたが、嬉しかったことの一つに、若い学生たちの発想の豊かさに出会えたことが上げられる。方法論の斬新さと言ひ換えてもいい。瑞々しい感性で、自明な創作空間にとらわれずに創り出した作品世界は、新鮮で大きな可能性を感じた。

一次選考を経て手元に届けられた作品は七編。なかでも受賞作となつた「爪探し」（小山響平）は、欠点を探すのが困難なほど完成度の高い作品で、やはり一歩抜きん出ているように思う。作品は、ぼくと女友達ヒカルとの交流を描いたものだ。狭い多くの部屋での数時間の出来事がディテールまで鮮やかに描写される。ドラマチックな出来事は何も起こらない。卵を焼いたり、ゴミ箱に捨てた三線の「爪」のことを気に掛けたりなどと、平凡な時間が過ぎていく。しかしこの時間には、たくさんの物語が凝縮されているようにも思われた。私たち団塊の世代とは違い、この時間は大きな物語を失つた若者たちの現実でもあり、何ものにも代え難い現実でもあるのだろう。文学が、視えない世界を描くとすれば、細部の表現の向こう側に隠れている闇や幸せまでも、見事に浮かび上がらせた作品だと言つていい。

他の佳作の三編も読み応えがあつた。「青年BBS」（華井けい）は、一気に作品世界へ引きずり込んでいく筆力と構力があつた。「青年BBS」とは、告示板のことを擬人化して名付けたものだが、このネーミ

ングから察せられるように、作者の周到な仕掛けと意図が遺憾なく發揮されて、作品世界が創り出されている。『青年BBS』によつて繋がる人間関係のもろさ、あやうさは象徴的で、繋がりへの拠点を求めて彷徨う若者の悲鳴が聞こえるようであった。ただ「死」さえもが「生」を持続させる切り札のように扱われるとすれば、やはり脱出への模索を考えなければならぬだろう。

「冬瓜」（玉那覇浩規）、「歓喜の挽歌」（菅谷聡）も高い評価を得た。「冬瓜」の作者の語彙の豊かさには驚かされた。かつて京都大学在学中の平野啓一郎が、漢語を多用した小説「日蝕」を発表して芥川賞を受賞したが、このことをも彷彿とさせる作品だった。作者は漢語的な表現だけでなく、ウチナーグチにも強い関心を有しているようだが、言葉への関心は、創作する者にとつて大きな武器の一つになる。土着を描く作者の視点は、既成の文学作品の限界をも突破するヒントを与えてくれるよう頼もしかった。「歓喜の挽歌」は、難解な作品だ。読者に対する作者の要求が高すぎるのかもしれない。しかし、読者は、混乱を強いられながらも、作者の意図を読み解いたとき、大きな喜びを感じるものだ。時代や空間をも飛び越えて造形した作者の意欲的な作品世界は高く評価されてもいい。

「ルル」「腕と少年」「I pray……」にも、確かな作品世界が構築されており、好ましかった。特に「腕と少年」は、刺激的な作品だった。交通事故で路上に飛び散った女の片腕を持ち帰り、ひそかに愛する作品世界は、文学の虚構性をも援用しながら極めて特異な世界を創り上げていた。受賞作との比較で言えば、「腕と少年」が、リアルな表現にすべてを出し切った作品であるのに対して、「爪探し」は作品の彼岸にある普遍的な世界をも暗示する象徴的な作品のように思えた。「ルル」は、完成度の高い作品だった。今日的な課題である「いじめ」や「老人介護」などをピュアに取り上げた作品で、文章力や構構力にも秀でていた。「I pray……」は、最も関心のあるテーマを背伸びをせずに、等身大の言葉で素直に描いた作品だった。ただその素直さが、予定調和的な結末を予感させ、既視感のある作品にしてしまった。プロットを作る

力には破綻がなく文章も洗練されているのだから、次回を期待したい。

文学作品の審査に当たって楽しいことは、刺激的な作品を逸早く読めることである。今回はその期待が満たされた。また、作品のレベルも、県内の他の文学賞のレベルに十分達しているように思われた。方法意識については、むしろ他の文学賞のレベルを越えているようにも思われた。学生諸君が、この賞を契機に、さらに飛躍をしていくことを期待したいものである。

(教育学部准教授)

第四回びぶりお文学賞選考経過

今回の応募作は昨年度と同数の十四編であった。しかし同数であっても質はちがっていた。昨年は総じてレベルが低かったが、今回はレベルの高い作品が集まった。候補作を絞るにも例年になく慎重さが求められ、難渋な面があった。確実に言葉の表現力が高くなっている、琉大生の文学表現のレベルが高くなっている、と感じた。これは喜ばしいことである。

学部別の応募は次のとおり。

法文学部六編／観光産業科学部一編／教育学部四編／理学部一編／医学部一編／農学部一編

年次別にみると、一年次三名、二年次二名、三年次三名、四年次六名であった。

この十四編から一次選考で次のとおり七編を候補作として選抜した。

〔I Pray……〕（阿部千明・観光産業科学部経営学科四年次）、「腕と少年」（松尾泰斗・農学部生産環境学部四年次）、「歓喜の挽歌」（菅谷聡・教育学部島嶼文化教育コース四年次）、「冬瓜」（スプイ）（玉那覇浩規・法文学部総合社会システム学科三年次）、「青年BBS」（華井けい・法文学部国際言語文化学科英語文化コース夜間主二年次）、「爪探し」（小山響平・理学部物質地球科学科物理系三年）、「ルル」（きのしたきのこ・教育学部生涯教育課程自然環境教育コース四年次）

選考会は二〇一〇年十二月六日に行った。その結果、候補作のなかから受賞作に「爪探し」（小山響平）、佳作に「冬瓜（スプイ）」（玉那覇浩規）、「青年BBS」（華井けい）、「歓喜の挽歌」（菅谷聡）の三編が決まった。これらの作品を含め、候補作についての選評は選考委員の詳細の文章を読んでほしい。選評には三名の選考委員の丁寧な指摘と激励がこめられている。今回受賞した小山さんは三度目の挑戦である。日常の場面にディティールな動きを織り込んで微妙な心理の綾を出しているところなどうまいところがあった。佳作に

なった三作に対しても高い評価があった。県内のほかの文学賞に匹敵するほどレベルが高いとの選考委員の評価もあった。とすれば書くことを続けて学外の数多の文学賞にもチャレンジして評価を受けて欲しい。

今回で四回目だが、琉球大学生の文学創造意欲が着実に定着してきているような気がする。文化は持続することで歴史と伝統を作るものだ。この賞を端緒として、かつて先輩たちが時代をリードするような活躍をした「琉大文学」時代を彷彿させるような、沖縄の新しい文学創造のウエイブになるほどの姿を見せてくれたいと願っている。それには時代や状況を吸収して果敢に挑戦する意欲的精神が求められる。新鮮で若い感性から生まれる琉大文学をどんどん送り出したい。琉大には水脈が流れている。

(松原敏夫・琉球大学附属図書館びぶりお文学賞担当)

琉球大学はこれまで2名の芥川賞作家を始め文学各界で活躍する人材を多く輩出してきた大学です。
 びぶりお文学賞は本学の文学活性化をさらに図るため平成19年度に創設されました。今年も募集しますので、多数の応募お寄せください。

作品募集

本学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出する。

募集〆切 平成22年10月31日
発表 平成22年11月30日(予定)

受賞作1編 海外旅行20万円相当もしくはノート型パソコン(同)
 佳作3編 1編につき図書カード5万円分



【選考委員】

- 山里勝己(法文学部教授)
- 喜納育江(法文学部准教授)
- 大城貞俊(教育学部准教授)

第四回びぶりお文学賞

応募要領

- ジャンルは小説とする。
- 応募資格
本学の学生(大学院生、留学生を含む)。
- 応募方法
①個人
応募原稿は未発表作品に限る。(同人誌などにすでに発表したものは選考の対象外とする。)
原稿枚数は、1ページ30字×40行、17枚(400字詰め原稿用紙50枚相当)以内、A4縦長用紙(24番書き、10ポイン
トのワープロ文字)で印刷する。
必ず通し番号(ページ番号)を入れて右肩を折る。
必ず1枚目にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
原稿の末尾に住所、電話番号、氏名(本名)、学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年を付記する。(個人情報は応募に關する連絡以外には使用しない)
②応募原稿は返却しない。
- 送付先および問い合わせ
琉球大学附属図書館情報サービス課(担当:松岡) 庁903-0214 沖縄県西原町字手原1番地
電話:098-993-8697 mail: toshio@lib.u-ryukyuu.ac.jp
- 受賞作品は、図書館「びぶりお特別号」と図書館ホームページに掲載する。
- 事業の主管部署 附属図書館
ホームページ <http://www.lib.u-ryukyuu.ac.jp>

第四回琉球大学びぶりお文学賞作品集

発行日 二〇一一年三月一日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三—〇二一四

沖縄県中頭郡西原町字千原一番地

印刷 株式会社アント出版